資 料 1

特別史跡加曽利貝塚
新博物館基本計画（案）

2022年〇月

千葉市教育委員会

はじめに

千葉市を代表する歴史資産「特別史跡加曽利貝塚」は、国内最大級の規模を誇る貝塚であり、約５千年前から２千年にわたって縄文人が繰り返しムラを営んできた国内屈指の集落遺跡として知られています。また、遺跡の発見から今日まで１３５年に及ぶ歴史を有し、縄文文化の研究や遺跡の保存運動の歴史においても欠くことのできない価値を有し、まさに我が国文化の象徴といえる遺跡です。

さらに、市内では１２０か所を超える貝塚が確認されており、その日本一の密集度から本市は「貝塚のまち」とも呼ばれています。縄文時代の東京湾東岸では、大きな干潟が広がり、穏やかな気候と豊かな海産資源など自然の恵みが縄文人の暮らしを支えていたことを物語っています。

本市では、人々から選ばれ、愛される魅力的な都市で有り続けるために「千葉市らしい」都市アイデンティティを確立することを目指し、本市固有の歴史やルーツに根差した地域資源として「加曽利貝塚」、「オオガハス」、「千葉氏」、「海辺」の４つを選び、施策の「起点」、「基準点」として活用する取組みを進めていますが、縄文人から永きにわたって選ばれ続けた加曽利貝塚は、本市の都市アイデンティティを確立する上で重要な地域資源といえます。

令和３（２０２１）年１月、本市は市制施行から１００周年の節目を迎えましたが、これからの１００年先の未来を見据え、次期の「千葉市基本計画」では持続可能なまちづくりを取組みの中核の一つとして掲げています。自然と調和・共存する持続可能な未来の実現に向け、縄文文化から学び、現代そして未来に活かすことが、今を生きる私たちに求められています。

本市では、平成２９（２０１７）年１０月の加曽利貝塚の特別史跡指定を契機に、その価値を確実に未来へ守り伝えていくことはもとより、多くの人々が史跡に親しみ、保存活用を推進するため、史跡の再整備や加曽利貝塚の全体像の解明に向けた新たな発掘調査をスタートしました。また、特別史跡にふさわしい魅力ある場とするため、史跡内を縄文時代の景観に復元することを目指し、昭和４１（１９６６）年１１月に開館した千葉市立加曽利貝塚博物館を史跡外へ移転することとし、新たな博物館を整備する方針を示しました。

新博物館では、現在の博物館が進めてきた特色ある活動を継承するだけでなく、計画的・継続的な発掘調査をはじめ、貝塚を中心とした縄文文化の調査と研究を推進することが、加曽利貝塚の価値を正しく理解するために欠かせません。また、史跡や出土資料等を適切に保存し、継承していくための環境と体制を整備すること、それらの成果を展示や教育・普及活動等を通じて市民に還元していく取組みも必要です。さらに、持続可能な社会の実現に寄与する施設・設備の整備を進めるとともに、縄文社会の持続可能性に学び、現代や未来に活かしていくことも重要です。

今後、縄文文化とＳＤＧｓを学ぶことができる博物館を目指し、市民や団体、大学、民間事業者など多様な主体と対話や交流を深めながら、新博物館の整備と活用を進めていく指針となるよう、この基本計画を策定しました。

令和４（２０２２）年〇月
千葉市教育委員会

目次

Ⅰ　新博物館の基本的な考え方

1　背景と本計画の位置付け …… 2
2　新博物館整備に向けた課題の整理 …… 5
3　新博物館の基本方針 …… 10

Ⅱ　事業活動計画

1　事業活動の全体像 …… 20
2　事業活動の方針 …… 21
3　事業活動の展開 …… 22
4　利用者の見学・体験の流れ …… 32
5　事業連携等による魅力向上のための取組み …… 34

Ⅲ　施設計画

1　施設整備の方針 …… 36
2　施設計画検討に係る条件設定、
　予定地の条件整理 …… 38
3　諸室の構成 …… 42

Ⅳ　展示計画

1　展示展開の方針 …… 48
2　テーマ構成 …… 49
3　解説計画 …… 64

Ⅴ　管理運営計画

1　管理運営の方針 …… 66
2　管理運営方式 …… 67
3　管理運営体制のイメージ …… 68
4　「みんなでつくる・育てる博物館」に
　向けた考え方 …… 69
5　開館形態 …… 71

Ⅰ　新博物館の基本的な考え方

１　背景と本計画の位置付け

（１）計画策定の背景

ア　加曽利貝塚の特別史跡指定

千葉市では、加曽利貝塚の保存運動の契機となった昭和３７（１９６２）年の北貝塚発掘調査から半世紀を迎えた平成２４（２０１２）年、加曽利貝塚の魅力と価値を市民に再認識してもらうとともに、新たな価値付けを行うことを目指し、特別史跡指定に向けた取組みに着手しました。

まず、加曽利貝塚の価値を示すため、平成２８（２０１６）年までの５か年で、過去の発掘調査の成果を再整理し、平成２９（２０１７）年３月に『史跡加曽利貝塚総括報告書』（以下「総括報告書」という。）を刊行しました。

さらに、保存活用に対する市の方針を示すため、平成２７（２０１５）年から史跡の保存活用計画の検討を進め、平成２９（２０１７）年１月に『史跡加曽利貝塚保存活用計画書』（以下「保存活用計画」という。）をまとめました。「保存活用計画」では、将来へ確実に継承していくべき加曽利貝塚の本質的価値を整理するとともに、その価値を保護しつつ、史跡指定地内を縄文時代の景観に復元し、**史跡指定地内に建つ千葉市立加曽利貝塚博物館を指定地外へ移転する**方針を示しました。

市は、これらの成果をもとに文化庁長官あてに特別史跡指定の意見具申を行い、平成２９（２０１７）年１０月、縄文時代中期から晩期までの約２千年にわたる生活の跡が今も良好な状態で保存されていること、貝層断面などの野外展示が埋蔵文化財の整備・活用に関して先駆的な存在であることなどの様々な観点から、我が国の文化の象徴であるとして、貝塚では初めて、縄文時代の史跡では４例目となる特別史跡に指定されました。

イ　グランドデザインの策定

特別史跡指定を受け、市では、縄文の森特別緑地保全地区をはじめ、周辺地域を含めた魅力向上を図るため、平成３１（２０１９）年２月に『特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン』（以下「グランドデザイン」という。）を策定しました。

史跡指定地内については、貝層等を適切に保護しつつ、縄文時代の景観復元を目指した整備を進め、縄文体験等での活用を図ることとし、縄文の森特別緑地保全地区では、豊かな自然を保全しつつ、より娯楽性のある体験や自然観察などを楽しめる整備・活用を図る方針を示しました。

博物館の移転場所の検討も行い、モノレールや幹線道路に接し、運営や集客の観点からも効果的な活用が見込める**小倉浄化センター跡地及びその周辺に移転する**こととし、**「縄文文化や貝塚の研究と、その成果を発信する拠点」を目指し、新たな博物館を整備する**方針を示しました。

「保存活用計画」及び「グランドデザイン」での検討を踏まえ、平成３１（２０１９）年４月から新たな博物館の整備に向け、基本計画の策定に着手しました。

特別史跡加曽利貝塚

◎国内最大級の貝塚を伴う集落遺跡

縄文時代中期（約５～４千年前）を中心に形成された直径１４０ｍの環状の北貝塚と、縄文時代後期（約４～３千年前）を中心に形成された直径１９０ｍの馬蹄形の南貝塚が連結し、８字形の特異な形状をした貝塚を伴う国内最大級の集落遺跡です。

空から見た特別史跡加曽利貝塚

◎縄文時代の風景を想起させる景観が残る

二つの大型貝塚が丸ごと残されているだけでなく、縄文人が暮らした集落跡を含めて保存されています。さらに、縄文人が海との行き来に利用していた坂月川や豊かな緑地が縄文の森特別緑地保全地区として守られ、都市化が進む市街地にあって、縄文時代の風景を想起させる景観が保全されています。

◎明治時代から続く調査・研究の歴史

明治時代から続く１００年以上の調査・研究の歴史があり、約１４０軒の竪穴住居跡や２００体以上の人骨、長径１９ｍに及ぶ大形建物跡などが貝層の内外から見つかっています。実際に発掘調査が行われた面積は全体の約８％、貝層部分に限ると約３％に過ぎず、今なおその全容は把握されておらず、多くの可能性を秘めた遺跡といえます。

◎市民主導の保存運動

昭和３０年代には宅地造成による破壊の危機に陥りましたが、多くの学生や地元の人々が発掘調査に参加し、その成果によって遺跡の重要性を示すとともに、「加曽利貝塚を守る会（現・NPO 法人加曽利貝塚博物館友の会）」を中心とした市民主導の保存運動により１万人を超える署名が国会へ届けられ、保存を実現しました。

◎半世紀以上に及ぶ保存・活用の歴史

保存運動の要望を受けて設置された現博物館では、開館以来、住居跡群観覧施設や貝層断面観覧施設、復元住居などの野外観覧施設の設置をはじめ、遺跡そのものを展示物とする野外博物館としての活動を実践してきました。

また、「加曽利貝塚土器づくり同好会」による縄文土器の復元製作や「加曽利貝塚ガイドの会」によるボランティアガイドをはじめ、半世紀にわたり、市民とともに史跡の活用が進められてきました。

平成２９（２０１７）年からは加曽利貝塚を営んだ集落社会の性格や特徴、全体像の解明に向け、新たな発掘調査に着手しています。

【史跡指定と整備の歴史】

昭和 39(1964)～昭和 42(1967)	北貝塚の公園整備
昭和 41(1966)11 月	博物館開館
昭和 46(1971) 3 月	北貝塚の史跡指定 約 5.7 ヘクタール
昭和 52(1977) 9 月	南貝塚の追加指定 約 7.4 ヘクタール
昭和 61(1986) 8 月	東傾斜面追加指定 約 0.5 ヘクタール
昭和 63(1988)～平成 5(1993)	南貝塚の史跡整備
平成 29(2017) 2 月	北側山林等追加指定 約 1.5 ヘクタール
平成 29(2017)10 月	特別史跡指定 約 15.1 ヘクタール
令和元(2019)～	史跡再整備に着手

（２）本計画の目的と位置付け

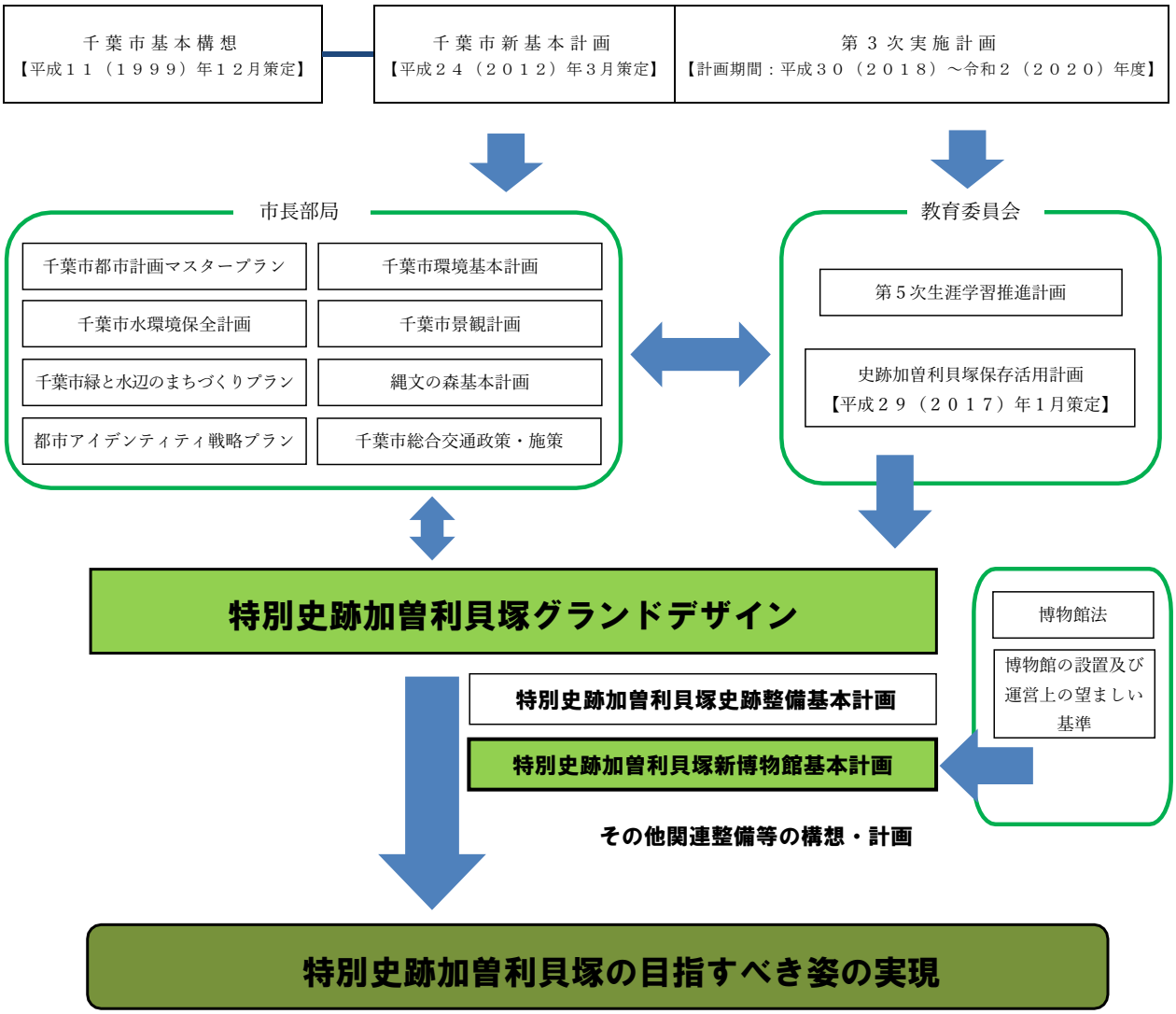
ア　目　的

本計画は、「特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像」（７ページ参照）の実現に向け、史跡指定地内に建つ千葉市立加曽利貝塚博物館（以下「現博物館」という。）を指定地外へ移転し、新たに貝塚を中心とする縄文文化の研究と、その成果を発信する拠点として、史跡のガイダンス機能を備えた「特別史跡加曽利貝塚新博物館」（以下「新博物館」という。）についての基本計画を策定するものです。

イ　位置付け

本計画は、「千葉市基本構想」、「千葉市新基本計画」を受けて作成した「保存活用計画」及び「グランドデザイン」に基づき、策定します。

また、「特別史跡加曽利貝塚史跡整備基本計画」をはじめ、その他個別計画と整合を図ります。



２　新博物館整備に向けた課題の整理

（１）新博物館の役割

「保存活用計画」に基づき、我が国文化の象徴たる特別史跡である加曽利貝塚の価値を確実に未来へ守り伝えていくため、また、「グランドデザイン」に基づき、「貝塚を中心とした縄文文化の研究と、その成果を蓄積し、広く内外に発信する拠点」を目指す上で、新博物館が果たすべき役割は大きく３つ挙げられます。

① 加曽利貝塚の本質的価値の保存と継承

②「特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像」の実現

③ 現博物館が培ってきた特色ある活動の継承と発展

ここでは、新博物館がこれらの役割を果たす上での課題を整理します。

（２）課題の整理

ア　加曽利貝塚の本質的価値の保存と継承

「保存活用計画」では、「総括報告書」の成果等に基づき、次世代へ守り伝えていくべき加曽利貝塚の特徴を「加曽利貝塚の本質的価値」として下記の９点にまとめました。

【加曽利貝塚の特徴】

特徴①
東京湾沿岸に分布する
大型貝塚を象徴し
環状と馬蹄形が連結する
特異な形状

特徴②
縄文時代の文化と社会を
紐解く情報の宝庫である
良好な保存状態の貝層

特徴③
２千年の歴史の中で累積した
多数の埋葬人骨や大形住居を
まるごと残す拠点集落

特徴④
縄文時代と現代を
つなぐ
谷津の里山景観

特徴⑤
様々な機関や研究者が
発掘調査を行い
近代考古学発展に寄与

特徴⑥
縄文土器編年の
標準遺跡として
土器研究の発展に寄与

特徴⑦
全国初の
市民主導による
遺跡保存の実現

特徴⑧
野外博物館の実践と
それを支える
保存科学の試み

特徴⑨
自然と調和した
持続可能な社会を築き
２千年続いた貴重な集落

新博物館には、これらの特徴を表す遺構・遺物や自然環境、さらには調査記録や研究成果等を適切に保存・継承するとともに、展示等を通じて情報公開・発信していく責務があり、以下の課題があります。

区　分	課　題	該当する特徴
調査・研究	未発掘部分が９割以上を占め、集落の変遷や貝層の形成過程をはじめ、加曽利貝塚の性格や特徴、全体像の解明に向け、計画的な発掘調査を進める必要がある。	① ② ③
	新たな価値の提示に向け、学術的な調査研究体制を確立するとともに、大学や研究機関等との連携を推進する必要がある。また、外部研究資金を導入した調査研究が行える体制を整える必要がある。	① ② ③
	野外観覧施設内の貝層や住居跡の露出展示を維持・公開するため、保存処理に関する持続的な調査･研究を推進する必要がある。	⑧
収集・保存	過去の発掘調査の出土資料、調査記録等について、形態・材質等に応じた適切な保存環境を整えるとともに、必要な収蔵・保管スペースを確保する必要がある。	① ② ③
	出土資料の文化財指定を目指し、重要文化財等の保存が可能な特別収蔵庫を設置する必要がある。	① ② ③
	次世代へ継承すべき加曽利貝塚に関するあらゆる情報の集約に向け、加曽 利貝塚をテーマにした研究資料や保存運動等に関する資料を収集する必要がある。	⑤ ⑥ ⑦
展　示	出土資料だけでなく、史跡内に残る貝層や遺跡周辺の自然環境も加曽利貝塚の本質的価値を正しく理解する上で欠かせないものであり、関連付けた展示構成を検討する必要がある。	① ② ③ ④ ⑧ ⑨
	加曽利貝塚や縄文文化の価値や魅力を伝えるため、加曽利貝塚の出土資料だけでなく、重要文化財などを借用して展示できる施設・設備や体制を整える必要がある。	① ② ③
教育・普及	周辺の豊かな自然環境についても、自然観察会の開催等を通じて紹介する必要がある。	④
	加曽利貝塚や縄文文化について学んだことを現代や未来に活かすための仕組みを整える必要がある。	⑨
情報公開 ・発信	過去の発掘調査記録をはじめ、加曽利貝塚に関する資料をデジタル化し、アーカイブスを構築して発信できる体制を整える必要がある。	① ② ③ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

イ　「特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像」の実現

「グランドデザイン」では、「保存活用計画」で示した「史跡加曽利貝塚の目指すべき姿」の４つの項目に基づき、目指すべき将来像の実現に向け、加曽利貝塚が果たすべき「特別史跡としての役割」、「緑地、公園としての役割」、「博物館としての役割」を示しました。新博物館では、「博物館としての役割」だけでなく、「特別史跡としての役割」、「緑地、公園としての役割」についても担うべき事項があり、以下の課題があります。

【加曽利貝塚の目指す将来像（「保存活用計画」「グランドデザイン」より）】

史跡加曽利貝塚の目指すべき姿　（「保存活用計画」p1）

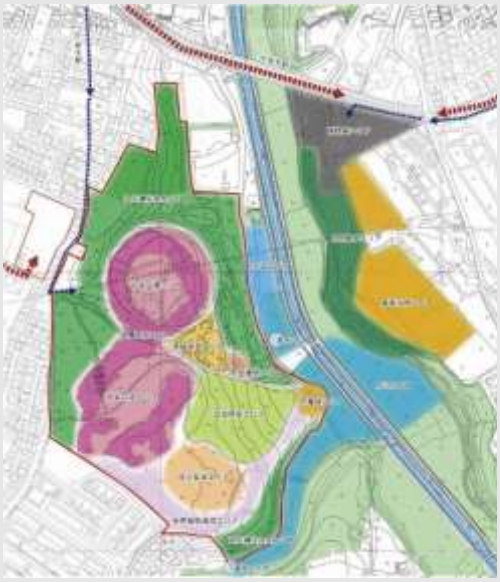
○縄文文化と貝塚の性格を究明し、調査研究の成果を世界に発信していく拠点
○研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる史跡
○多くの人が集い、地域交流の中核を担う拠点
○人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る史跡

特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像　（「グランドデザイン」p11）

1　特別史跡としての役割	2　緑地、公園としての役割	3　博物館としての役割
・我が国文化の象徴たる遺跡としての価値を守り育て、新たな価値を生み出す史跡 ・研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる史跡 ・貝塚の調査研究、整備方法を後世に伝えていく史跡 ・人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る史跡	・史跡と一体となった縄文時代の景観を演出する場所 ・自然環境の保全と育成を通して自然に親しみ、くつろぎの空間を演出する場所 ・学習や遊びなど多様な活動を行う場所	・幅広い調査研究を推進し、縄文文化と貝塚の性格を究明していく拠点 ・縄文文化と貝塚に関する資料を収集保存し、後世へ守り伝えていく拠点 ・調査研究の成果を積極的に公開活用し、世界に発信していく拠点 ・学校教育や生涯学習など多様な学習を支援し、加曽利貝塚に携わる人材を育てていく拠点

コアエリアのコンセプト　（「グランドデザイン」p22～35）

本物を感じる体験型学習観光施設
～日本最大級の貝塚で唯一無二の縄文体験～



●遺構保存ゾーン	ほんものの縄文にふれる史跡
●公開活用ゾーン	縄文の生活を体験するムラ
●縄文植生ゾーン	暮らしを支える森（縄文植生再現）
●自然保護ゾーン	暮らしを支える森（保護優先）
●新博物館ゾーン	縄文文化や貝塚の研究と、その成果を発信する拠点
●水辺公園ゾーン	楽しみ、集う公園（水辺の活用）
●縄文の森ゾーン	楽しみ、集う公園（緑地の活用）

【「特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像」の実現に向けた課題】

特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像			新博物館の課題
1 特別史跡 としての役割	・我が国文化の象徴たる遺跡としての価値を守り育て、新たな価値を生み出す史跡	→	・新たな価値を生み出す調査・研究を継続的に進める必要がある。 ・出土資料・遺構を適切に保存・継承していくために必要な施設・設備・人材を確保する必要がある。
	・研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる史跡	→	・研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる展示・体験を提供する必要がある。
	・貝塚の調査研究、整備方法を後世に伝えていく史跡	→	・貝塚の調査・研究、整備方法を後世に伝えていく体制整備を進める必要がある。
	・人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る史跡	→	・人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る調査・研究を進め、展示・体験等に反映させる必要がある。
2 緑地、公園 としての役割	・史跡と一体となった縄文時代の植生景観を演出する場所	→	・展望スペース等、縄文時代の植生景観を一望できる環境を整備する必要がある。
	・自然環境の保全と育成を通して自然に親しみ、くつろぎの空間を演出する場所	→	・自然に親しみ、くつろぎの空間を演出するためのサービス機能の充実を図る必要がある。
	・学習や遊びなど多様な活動を行う場所	→	・天候にかかわらず、学習や遊びなど多様な活動を安全・安心に行えるスペースを確保する必要がある。
3 博物館 としての役割	・幅広い調査研究を推進し、縄文文化と貝塚の性格を究明していく拠点	→	・必要な施設・設備・人材を確保し、連携体制を整える必要がある。
	・縄文文化と貝塚に関する資料を収集保存し、後世へ守り伝えていく拠点	→	・必要な施設・設備・人材を確保する必要がある。
	・調査研究の成果を積極的に公開活用し、世界に発信していく拠点	→	・調査・研究の成果の積極的な展示・発信に努める必要がある。
	・学校教育や生涯学習など多様な学習を支援し、加曽利貝塚に携わる人材を育てていく拠点	→	・学校教育や学芸員養成などの大学教育、生涯学習をはじめ、多様な学習への支援体制を整備する必要がある。 ・加曽利貝塚に携わる人材育成を継続的に進める必要がある。

ウ　現博物館の特色ある活動の継承と発展

現博物館では、昭和４１（１９６６）年１１月の開館以来、「東京湾沿岸の貝塚文化」と「縄文土器製作技術の研究」をメインテーマに据え、研究活動を進めてきました。

また、これらの成果を踏まえ、縄文土器づくりの技術を復元・体系化し、昭和４５（１９７０）年から縄文土器づくりの体験講座を開催するなど、市民参加型の教育普及事業をいち早く実践・継続してきました。平成１５（２００３）年からはボランティアガイドを導入し、史跡と現博物館の解説や週末の縄文体験の提供などを行っています。

現博物館では、開館以来半世紀にわたり、縄文土器づくり、アンギン編み、縄文食づくりなどの体験学習システムを実験考古学的な研究を通じて開発してきた実績があります。このような加曽利貝塚でしか提供・体験することのできない特色ある活動については、必要な施設や設備、人材を確保し、新博物館でも継承・発展させていくことが重要です。

◎ 『貝塚博物館紀要』の刊行
◎ 出土動物遺体の分析に必要な動物骨格標本の収集
◎ 縄文土器製作技術の研究と縄文土器づくり講座の開催
◎ ボランティアガイドによる史跡見学者への解説
◎ 弓ぎり式の火おこしやアンギン編みなど、縄文体験の開発と提供
◎ イボキサゴやクリ・ドングリなどを用いた縄文食の開発と提供
◎ 史跡を活用したイベントの開催（縄文春まつり、秋まつり等）
◎ 大学等と連携した調査研究や人材育成

３　新博物館の基本方針

（１）新博物館のコンセプト

「２ 新博物館整備に向けた課題の整理」での検討を踏まえて、新博物館のコンセプトを以下のとおり設定します。

生きている縄文

学び、体験し、考える

-それは未来への道しるべ-

数千年の長きにわたり自然と調和・共存し築かれてきた縄文人の暮らしと文化は、人間社会の原点として、現在の私たちの生活・文化の根底をなすものであり、過去のものではありません。私たちは、この「生きている縄文」を学び、体験し、現代や未来との関わりを考えることで、「未来への道しるべ」とします。

最新の調査・研究によって縄文文化の実像を明らかにしその成果を世界に発信する

最新の調査・研究成果に基づいて縄文時代の空間を再現し全身で体験できる機会を提供する

縄文から学び、現代そして未来に活かせることをともに考え発信する場を提供する

現代と縄文時代をつなぐ存在としていつも身近にあり誰もが参加できる場を提供する

（２）新博物館の基本方針

新博物館のコンセプトを実現するため、基本方針を以下のとおり定めます。

貝塚を中心とする縄文文化の解明の拠点としての活動

縄文時代の文化と社会に関わる調査・研究及び資料の保存と活用の拠点として、その成果を広く世界に発信する活動を展開します。また、未発掘部分が９割以上を占める加曽利貝塚をはじめ、様々な貝塚の構造や成因などの全容究明を目指します。そのため、既存の研究課題や内容にとらわれず、研究の進捗にあわせて、また将来的な発展に備えて新たな課題や最新の研究成果を反映できる体制づくりを目指します。

自然と調和・共存する持続可能な未来の実現を目指す博物館活動

都市化、文明化した現代社会は、資源・エネルギーの外部依存をはじめ、環境汚染や地球温暖化など様々な課題が生じ、今、私たちは持続可能な社会への転換が求められています。その一方、縄文時代の人々は、自然と調和・共存し、限られた資源の中で、数千年に及ぶ持続可能な社会を築いていました。

加曽利貝塚において縄文の持続可能な人々の暮らしを探る調査・研究を行い、その成果を博物館における幅広い活動を通して、今、世界が取り組むＳＤＧｓ※を推進するとともに、持続可能な未来を切り拓く人材を育成する活動を展開します。

※Sustainable Development Goals:
誰一人取り残さない持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、
２０３０年を年限とする１７の国際目標

みんなでつくる・育てる博物館の実現

加曽利貝塚は、昭和の高度経済成長期に大規模開発が進む中、市民や研究者、学生の声によって保存されました。このように、市民とともに歩んできた加曽利貝塚博物館の伝統を継承し、今後は、大学や博物館などの調査・研究機関や博物館・史跡で実施するプログラムやイベントに関わる組織・団体などの関係機関との連携を拡大するとともに、これまで以上に市民との協働を重視した活動を展開します。また、計画段階から市民や関係機関の参画を促進し、開かれた博物館づくり、博物館運営を進めます。

加曽利貝塚への様々な興味・関心・幅広いニーズへの対応

国内外の研究者から市民や観光客まで、また、子どもや学生から大人、高齢者まで幅広い人々の多様な興味・関心・ニーズを、アンケートなどを通じて把握することによって、より多くの人がそれぞれの方法で加曽利貝塚に親しみ、その価値や魅力に触れることのできる活動を展開します。また、周辺エリアの魅力あるアクティビティと連携することで、新たな層を取り込み、活動の活性化を図ります。

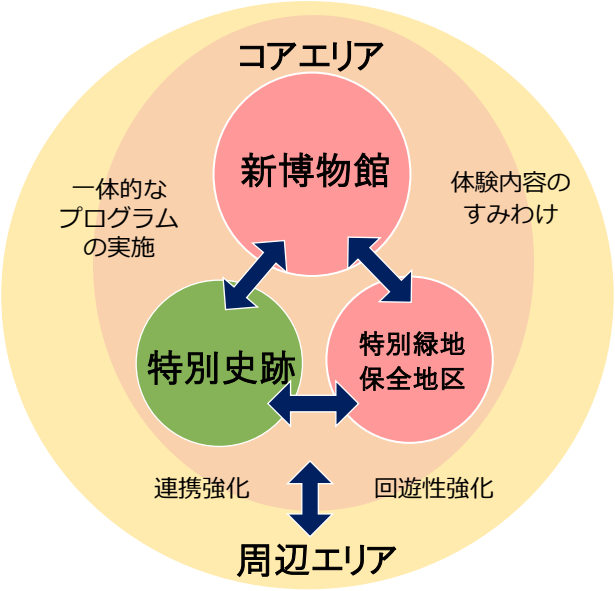
体験の重視

加曽利貝塚を訪れる人が縄文時代の景観と人々の暮らしを体験・体感できるよう、新博物館と特別史跡の各ゾーンを連携しながら一体的に活用していくことを重視し、コアエリア全体で、様々な体験ができる充実したプログラムを展開します。

縄文時代の文化と社会に関するテーマは、歴史の学習にとどまらず、現代の暮らしや未来について考えるための素材としても重要であることから、実験考古学的な研究の成果に裏打ちされた体験学習プログラムを作ることに努め、来館者自身が主体的に考え、試行しながら学ぶことができる幅広い体験のあり方を検討します。

（３）新博物館と各エリアの位置付け

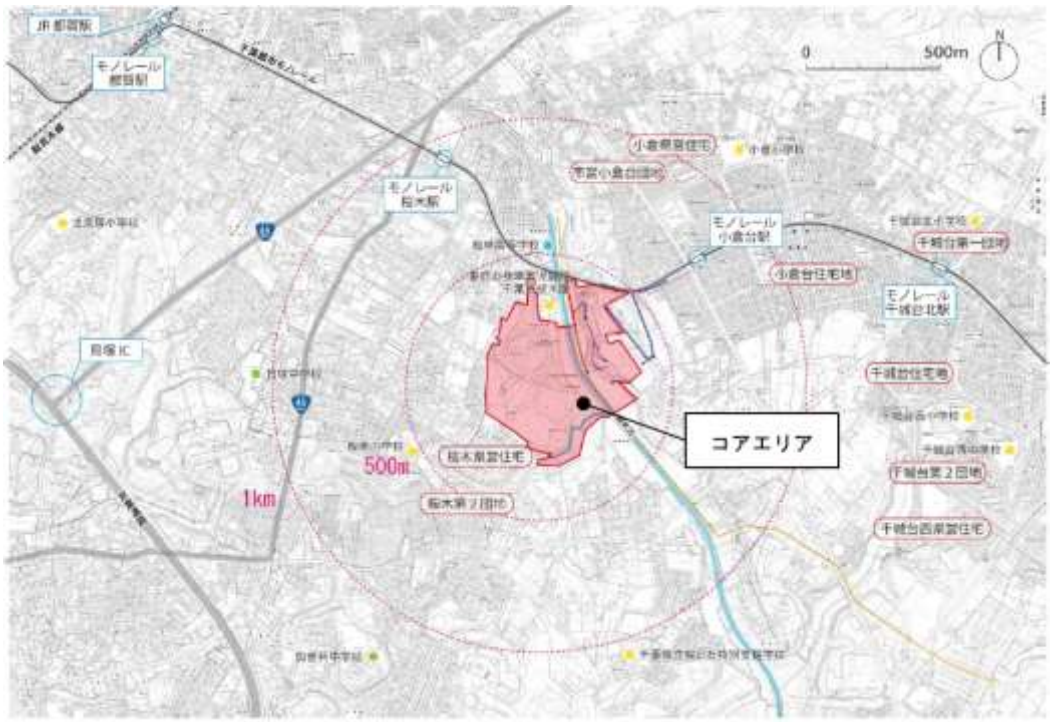
「グランドデザイン」では、コアエリアだけでなく、周辺エリアとのネットワーク化を目指しています。コアエリアの核である新博物館を中核として、周辺エリア全体に展開するネットワークを実現し、一体となって加曽利貝塚の価値や魅力を発信します。



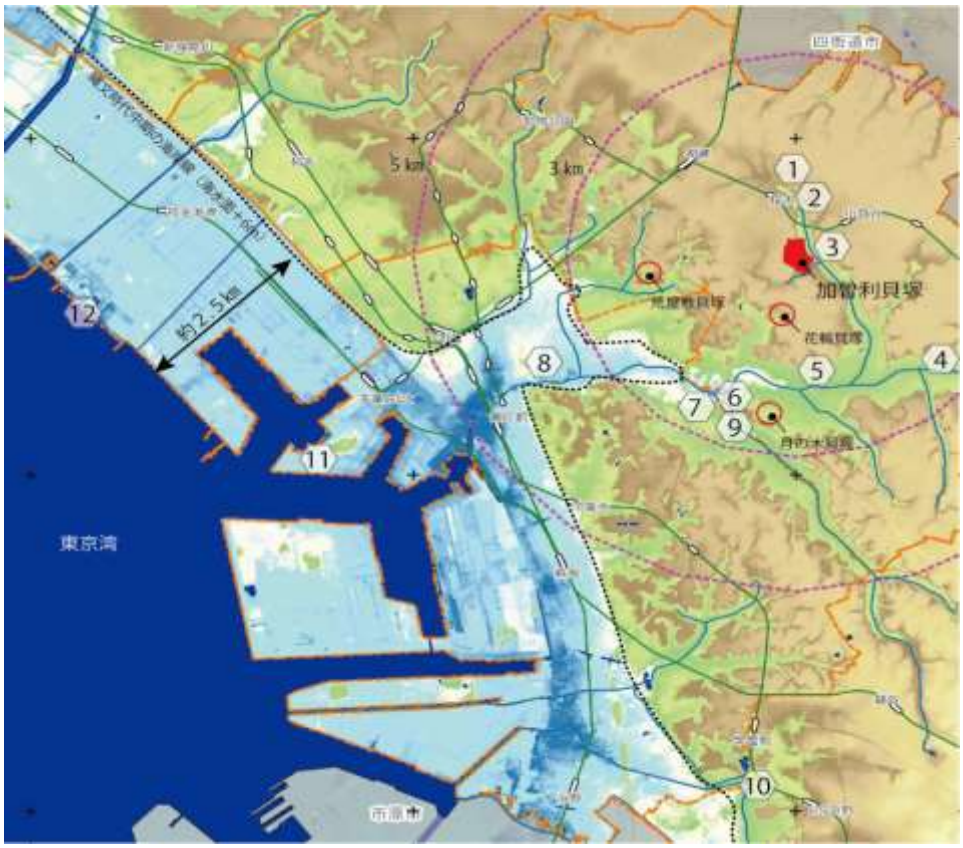
	エリア	各エリアの役割	来館者が体験できること
コアエリア	新博物館	**・出土資料の保存・活用** **・調査・研究成果の発信** **・体験学習の場** **・交流の場**	**まず新博物館へ** ○加曽利貝塚の全体像を知る、体感する ○縄文文化の特徴や魅力にふれる ○コアエリアの各ゾーンで体験できることを知る ○周辺エリアの自然環境や史跡などの特徴や魅力を知る ○加曽利貝塚を展望しながら、ゆったりとした時間を過ごす
	特別史跡	**・発掘調査** **・遺構の保存・整備** **・縄文時代の自然環境・生活環境の再現** **・体験学習の場**	**新博物館と特別史跡を行ったり来たりして楽しむ** ○体験や解説による学習（遺構保存ゾーン「ほんものの縄文にふれる史跡」） ○縄文の生活の再現展示、便益施設や復元集落での体験学習（公開活用ゾーン「縄文の生活を体験するムラ」） ○衣食住に利用された植物の観察や体験学習（自然保護ゾーン・縄文植生ゾーン「暮らしを支える森」）
	特別緑地保全地区	**・自然環境の保全** **・散策や自然観察**	**縄文時代につながる景観と自然環境を保全する** ○新博物館に隣接する緑地での自然体験
周辺エリア	**サテライト** 縄文小倉の森、坂月川ビオトープ、坂月川対岸の地層断面、荒屋敷貝塚、花輪貝塚、月ノ木貝塚、滑橋貝塚、大草谷津田いきものの里、都川、都川水の里公園、丹後堰公園、本町公園、都市緑化植物園、大百池公園、ポートパーク、稲毛海浜公園　等 **周辺の文化施設・商業施設等** **緑のネットワーク**	**・関連したテーマでの情報発信** **・連携したイベントでの開催等**	**興味を持ったサテライトなど周辺エリアを回遊する** ○加曽利貝塚や縄文時代と関係の深いサテライトを巡り、加曽利貝塚に暮らした人々の生活及びその環境の広がりを把握する ○文化施設等において、その地域と加曽利貝塚や縄文時代に関連する情報を知る ○縄文時代をテーマに、季節に応じたイベントに参加する ○滞在しながら加曽利貝塚の魅力をより深く感じる ○商業施設等において、加曽利貝塚や縄文時代をテーマにした土産品などを購入する

●コアエリア：特別史跡加曽利貝塚（約１５．１ｈａ）及び縄文の森特別緑地保全地区（約１６．５ｈａ）

●周辺エリア：グランドデザインでは、コアエリアの周辺地域（概ね下図全体）を周辺エリアとしていましたが、本計画では、サテライトのほか、緑のネットワークや周辺の文化施設、商業施設等も含めて周辺エリアと捉え、連携を図ります。



（「グランドデザイン」p5）



加曽利貝塚サテライト

No.	名称
1	縄文小倉の森
2	坂月川ビオトープ
3	坂月川対岸の地層断面
4	大草谷津田いきものの里
5	都川
6	都川水の里公園
7	丹後堰公園
8	本町公園
9	都市緑化植物園
10	大百池公園
11	ポートパーク
12	稲毛海浜公園

（「グランドデザイン」p36）

（４）利用者層の検討

「グランドデザイン」では、現博物館のこれまでの入館者推移や圏域人口などの分析を踏まえ、加曽利貝塚の主要なターゲットを、「小学校の団体」「小学生とその家族を対象としたファミリー」「シニア世代（６０歳以上)」と設定しています。

しかしながら、新博物館ゾーンのテーマを実現するためには、楽しみの場として訪れる市民をはじめ、調査・研究の対象として訪れる研究者や学生、ガイドや体験補助・史跡調査などに携わる人々など、多様な立場の人々の参画を促し、幅広い活動の活性化を図ることも求められます。

こうしたことに鑑み、新博物館の利用者層を以下のように設定します。

利用者像	想定されるセグメント	想定される機能
市民	・ファミリー	家族で楽しめる遊び場
	・小学生・中学生	遊び場・居場所、学習の場
	・高校生・大学生	居場所、活動・学習・研究の場
	・社会人	非日常的な学習・体験の場
	・シニア世代	学習の場、活躍の場、生きがい創出
研究者	・幅広い分野の研究者 ・大学生・留学生	発掘調査や共同研究への参画 自らの学習・研究のための利用
学校団体	・幼稚園	遊びながら史跡に親しむ
	・小学校、中学校、高等学校	地域の文化財を活用した学習の場、修学旅行
	・大学	博物館実習、資料調査などを通した専門職教育の場
観光客	・国内観光客	首都圏において、自然の中で縄文時代を体感できる学習観光施設として利用
	・海外観光客	

（５）ＳＤＧｓに基づく新博物館の取組み

平成１３（２００１）年に策定されたMDＧｓ（ミレニアム開発目標）の後継として，平成２７（２０１５）年9月、国連サミットにおいてＳＤＧｓが採択されました。２０３０年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標「持続可能な開発のための２０３０アジェンダ」として、１７のゴール・１６９のターゲットから構成され、地球上の誰一人取り残さないことを誓っています。ＳＤＧｓは先進国と発展途上国がともに取り組む普遍的なものであり、日本全体としても積極的な取組みが求められています。

新博物館では、自然エネルギーの活用などＳＤＧｓに沿った博物館整備・運営を推進するとともに、ＳＤＧｓの視点から縄文社会の持続可能性に関する展示や教育・普及活動を行うなど、ＳＤＧｓの推進に寄与する活動を展開します。

ア　ＳＤＧｓに照らした縄文文化や加曽利貝塚の意義

縄文文化や加曽利貝塚についてＳＤＧｓの視点からとらえた特徴として、下記の２点が挙げられます。

（ア）縄文社会の持続可能性

縄文人は、自然の中から数多の恵みを得つつ、その獲得・加工・調理・保存の技術を研き、持続可能な計画的資源利用により、列島各地に豊かな文化を築いてきました。なかでも貝塚からは、今日までつながる世界有数の魚食文化の礎を築いたと思われる遺物が多数発見されています。縄文時代の食文化を現代・未来に伝える一番の証拠として、日本が世界に誇るべき遺産です。

日本の各地で、自然環境の変化とともに安定と不安定を繰り返しながら、その地域の持つ特性を最大限に活かす文化が成熟した点が縄文社会の特色です。定住生活や安定した社会をつくるため、それぞれの地域での資源の獲得をいかに工夫し、持続的活用をしていたのか、また、なぜその地域を選んだのか、そのような暮らしぶりとともに自然と調和する人々の知恵や工夫を明らかにしていくことにこそ、縄文社会を知る意義があります。

また、縄文時代は気候変動や火山活動、温暖化による災害が多かったと考えられており、東北や関東の大型貝塚は津波や大雨の影響を受けにくい場所に立地しています。これは、災害による被害の記憶が語り継がれ、一つの場所に長く住むための知恵に活かされた結果と考えられます。加曽利貝塚には、災害と人の歴史を研究し学ぶ場所としても重要です。

（イ）社会の発展と文化財保護を両立させる象徴としての加曽利貝塚

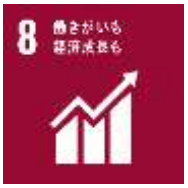
加曽利貝塚は、昭和の高度経済成長が進む中、多くの市民や研究者、学生の願いを受け取り、国会の場で議論されて保存を決定した唯一の事例です。市民が守ってきた周辺環境とともに、文化財保護の象徴的な存在であり、こうした点が特別史跡指定においても評価されていることに誇りをもち、次世代に継承していくことが重要です。

世界的に環境問題が議論され、ＳＤＧｓがすべての人間活動において配慮すべき事項

となった今、過去の反省に立った今後の持続可能な社会にとっての指針 ―人や環境にとって特に大事な地域の資産を失うような開発は避けるべきであること― を強く訴える存在として、加曽利貝塚の価値を改めて見直し、永久に残していくための活動を進めていく意義は大きいといえます。

イ　新博物館整備に関するＳＤＧｓのテーマと取組み

項目		博物館の取組み	関連するＳＤＧｓのゴール
事業活動	収集・保存・調査・研究	国内外の博物館や研究施設をはじめとした様々なパートナーシップにより、収集・保存、調査・研究を推進します。	パートナーシップで目標を達成しよう
	展示	あらゆる人が縄文時代の文化や社会、貝塚について学んだり体験できる機会を提供します。	人や国の不平等をなくそう
		縄文時代の気候変動でもたらされた自然環境の変化と人間生活の関係について調査・研究し、気候変動に対する予防と適応のあり方について考え、共有する場を提供します。	気候変動に具体的な対策を
		貝塚の研究によって縄文人の海産資源の利用の実態を解明し、東京湾の干潟・浅瀬の貝類の調査・研究を進めます。展示や学習プログラムを通じて海の豊かさ、大切さを伝えていきます。	海の豊かさを守ろう
		縄文人が利用した陸産資源の実態を解明し、展示や学習プログラムを通じて森林の豊かさ、大切さを伝えていきます。 植生調査や文化財ＩＰＭ(総合的病害虫管理)、史跡内及び周辺の森林の保護に取組み、活動内容を発信していきます。	陸の豊かさも守ろう
	教育・普及	子供から大人まで、様々な立場・目的の学習者に適合した展示や学習プログラムを用意して、文化財を学校教育や生涯学習に活用する場を提供します。	質の高い教育をみんなに
		縄文時代から戦前まで続いた地域資源の有効利用の手法を学んで、持続可能な資源利用や自然と調和したライフスタイルについて意識を高める場所に位置付けます。	つくる責任つかう責任

項目	博物館の取組み	関連するＳＤＧｓのゴール
施設整備	坂月川の生態系の保護・回復を図り、縄文時代につながる里山里海の景観の復元を目指します。 水の利用効率を高めた施設整備を行うとともに、井戸水等を災害時に提供できるようにします。 あらゆる人が利用しやすいトイレを整備します。	安全な水とトイレを世界中に
	エネルギー効率の高い建物及び施設を整備します。 自然エネルギーの活用により、災害時にも最低限の電源供給等が行えるようにします。	エネルギーをみんなにそしてクリーンに
	貴重な文化遺産である特別史跡加曽利貝塚を保護・保全します。 あらゆる人が安全かつ気軽に利用できる地域の交流拠点づくりを目指します。 貴重な文化財を有する博物館として、災害に対する強靱さを確保した施設を整備します。	住み続けられるまちづくりを
	博物館の計画段階から、ワークショップなどを通じて地域の人々との意見交換を行いながら、施設整備を行います。 大学など、外部研究機関との共同利用や、発掘実習、博物館実習の受け入れを推進するなど、「みんなでつくる・育てる博物館」としての施設を整備します。	パートナーシップで目標を達成しよう
管理運営	地域と連携し、持続可能な観光の促進を図ります。 あらゆる人が博物館活動に参画しやすい仕組みを構築します。 職員が働きやすい環境を実現します。	 働きがいも経済成長も
	あらゆる人が、多様な博物館活動に参加できる「みんなでつくる・育てる博物館」を実現します。 公共施設として、透明性の高い管理運営を行います。	平和と公正を全ての人に
	「みんなでつくる・育てる博物館」として、博物館の計画段階から開館後の運営まで、博物館サポーター、外部研究機関、学校、地域等、様々な人々と協力しながら行います。	パートナーシップで目標を達成しよう

※文化財ＩＰＭ：文化財をカビや害虫などの有害生物の被害から守るための環境改善や日常的な管理の取組み

加曽利貝塚に学ぶ縄文時代の循環型社会

狩猟採集を中心とした縄文社会では、定住生活や安定した社会を維持するため、限られた資源が枯渇しないよう、有効に活用することが求められました。将来の世代にわたって恵み豊かな生活を確保できるよう、最適生産・最適消費・最小廃棄を支える循環型社会の実現に向け、加曽利貝塚の発掘調査の成果から学ぶことができます。

◎稚貝の捕獲規制の可能性（資源の保護）

加曽利貝塚では、約５千年前から２千年間に及ぶ貝層の変遷を知ることができます。約５～４千年前に形成された北貝塚では、活発な貝類の採取活動の結果、ハマグリの年齢の若年化と小型化が進み、乱獲に近い状況であった様子が確認できます。

一方、約４～３千年前に形成された南貝塚では、構成年齢の上昇と大型化が見られることから、稚貝を採らないように道具や採り方を工夫したり、時期を決めて計画的に採取するなど、資源の維持のための仕組みがあった可能性が指摘されています。

◎道具の転用等（資源の有効活用）

出土する土器には、孔（あな）をあけて紐で結び補修したものがあり、漁網のおもりなどに転用された土器の破片も数多く出土します。また、欠けて使えなくなった石斧は、木の実などをすり潰す道具や砥石など別の用途に形を変えて、使い続けました。

狩りで得たイノシシやシカも、肉や内臓を食することはもちろん、毛皮や骨、角や牙も道具などに加工し、有効に活用しました。貝殻も刃を付けて道具として使ったり、焼いて貝灰にし、漆喰（しっくい）として利用しました。

（６）感染症対策を踏まえた事業活動の展開

新型コロナウイルスの世界的な蔓延を受け、博物館のあり方も大きな変革を迫られました。今後の開館に向けた整備期間中において博物館に求められる対応も変化することが予想されるため、計画の推進に当たっては、社会的な状況や要請に合わせた対策を随時導入していくこととします。

＜現時点で想定される取組み例＞

◎ 国際博物館会議（ＩＣＯＭ）や公益財団法人日本博物館協会が示すガイドライン等の遵守

◎ オンラインコンテンツの拡充

・縄文時代の文化や社会、加曽利貝塚に関する双方向性のある学習プログラム
・学校教育と連携したオンライン学習プログラム
・バーチャルミュージアム（開館前から公開しバーチャル来館体験ができ、開館後は来館による実体験とリンクする）　等

◎ 対応した設備の整備

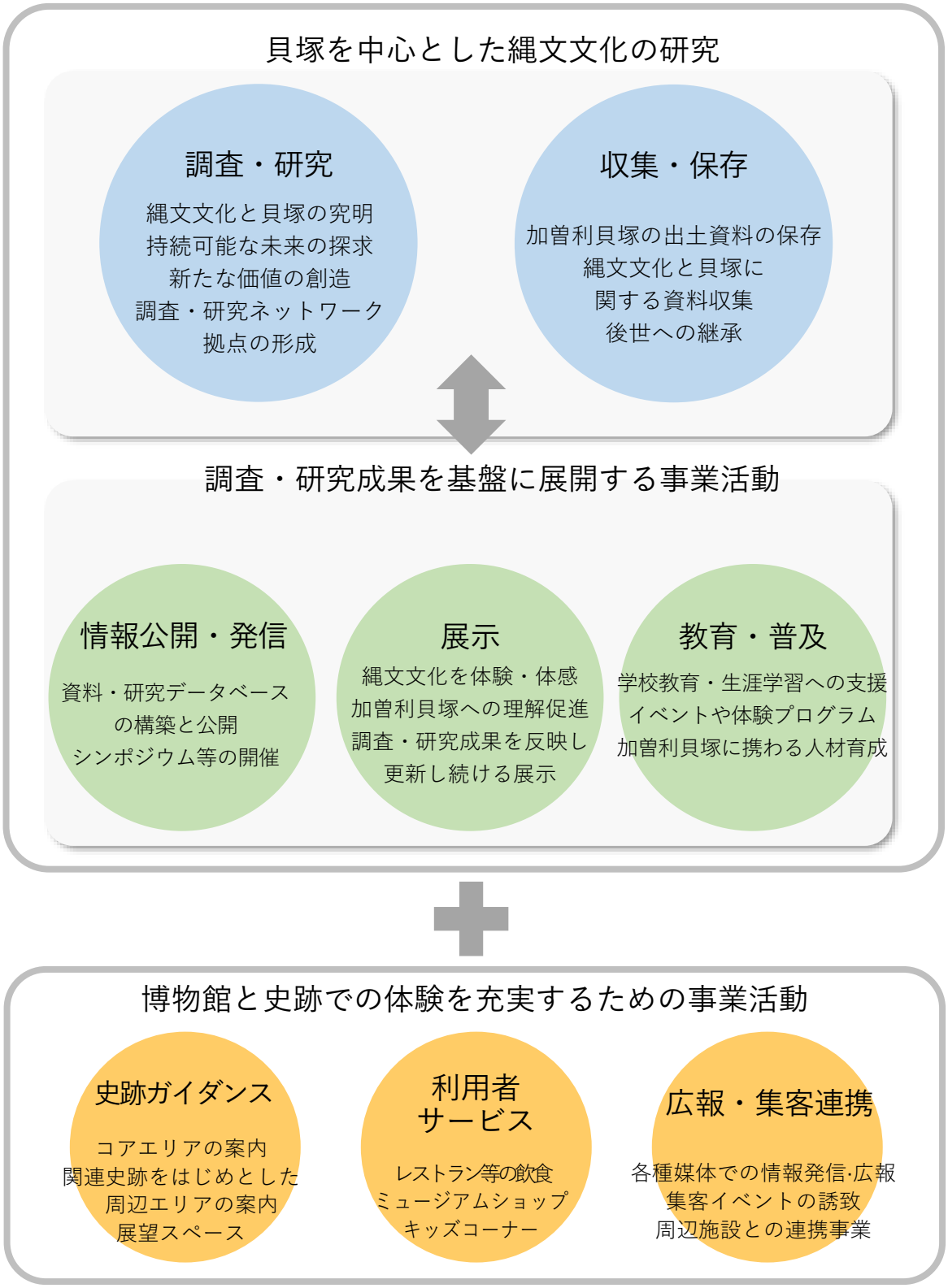
・ウイルス感染を防ぐ空調設備、換気システムの導入

Ⅱ　事業活動計画

1　事業活動の全体像

「新博物館の基本方針」を実現するため、次の事業活動を展開します。

調査・研究と収集・保存を基盤とし、情報公開・発信、展示、教育・普及などの博物館の中核となる機能に加え、史跡のガイダンス、利用者サービス、広報・集客連携など、博物館と史跡での体験を充実させるための事業活動を行います。



2　事業活動の方針

新博物館では、次の方針に沿って、コアエリア全体をフィールドとした事業活動を展開します。

【事業活動の方針】

1．活発な調査・研究を行います

貝塚を中心とした縄文文化を解明するための施設と体制を備えるとともに、各分野との幅広い連携により研究ネットワークを築き、活発な調査・研究を推進します。

2．調査・研究のプロセスや最新の成果を素早く発信します

調査・研究の成果を世界に発信するとともに、その過程も紹介することで、来館者が興味を持って身近に触れられる場を設けます。

3．縄文時代の暮らしをまるごと体験する機会を提供します

最新の調査・研究成果に基づいて、縄文時代の空間を再現・演出し、来館者が当時の暮らしをまるごと体験する機会を提供します。

4．自ら学び、考える仕掛けを重視し、生きる力を育みます

体験や展示を通して知識を得るだけでなく、来館者が現代の暮らしの課題を解決するヒントや未来に活かせるよう、問いかけ・対話などの仕掛けやサポートを充実します。

5．誰もが気軽に集い、交流が生まれる空間を提供します

何度でも通いたくなるワクワクするような空間や体験を提供するとともに、誰もが気軽に集うことのできる、親しみやすく、居心地の良い空間を演出します。

3　事業活動の展開

（1）調査・研究

ア　基本方針

加曽利貝塚は、未発掘部分が９割以上を占め、縄文時代においてどのような位置を占めるのか、あるいは生業や拠点集落としてどのような機能を持っていたのかを明らかにすることが、今後の縄文時代の文化や社会に関する研究や新しい博物館の活動の方向を大きく左右します。

中長期的な計画の下で継続的に調査・研究を進め、その情報を蓄積し、さらに発信していくことが重要です。研究の中核を担うネットワーク拠点として、貝塚や縄文時代の史跡を有する自治体、研究機関や博物館などと連携し、縄文時代の文化や社会、貝塚の究明に向けた調査・研究、情報の収集・発信を行います。

また、縄文土器の製作技法の研究を推進し、その成果を土器づくりの体験学習や土器を使用した縄文料理づくりなどの体験学習プログラムとして全国に普及させてきたことも加曽利貝塚の特徴です。さらに、発掘された住居跡や貝層断面を保存し、展示する保存処理技術の開発研究におけるトップランナーとして重要な役割を果たしています。これらの現状や実績を踏まえ、持続的な調査・研究を推進します。

イ　研究の視点

（ア）加曽利貝塚の調査・研究

・加曽利貝塚における計画的な発掘調査の推進
・発掘調査の成果に基づいた、加曽利貝塚を営んだ集落社会の性格や特徴、全体像の究明
・加曽利貝塚の新たな価値を生み出す調査・研究

（イ）貝塚の調査・研究

・貝塚に関する情報収集、調査・研究の推進

（ウ）縄文時代の文化や社会に関する調査・研究

・縄文時代の文化や社会の究明に向けた調査・研究の推進
・調査・研究を通した、自然と調和・共存する持続可能な未来の探求
・実績ある実験考古学の継承・発展

ウ　研究テーマ

加曽利貝塚は貝塚で唯一の特別史跡であり、日本列島に残る縄文時代の貝塚のうち約４分の１が千葉県に集まっています。その地域的・歴史的な特性を踏まえ、東京湾岸の大型貝塚群を起点とした研究テーマを設定します。

さらに、新博物館の基本方針である「貝塚を中心とする縄文文化の解明の拠点」とし

ての活動を展開するため、専門研究の深化と諸分野との共同研究を推進し、日本列島の歴史の中で、さらには世界の歴史のなかで、加曽利貝塚を中心とした東京湾岸の大型貝塚の性格の解明を目指します。

エ　調査・研究型博物館としての推進体制

（ア）学芸員等による調査・研究

・新博物館に所属する学芸員が、調査・研究の中心的役割を担う

（イ）研究者等との共同研究

・国内外の大学、研究機関、企業などとの連携・交流や研究者の受入れ

・調査・研究活動への市民参画

（２）収集・保存

ア　基本方針

加曽利貝塚の発掘調査で出土した資料、縄文時代の文化や社会、貝塚に関わる調査・研究や展示に必要な資料を収集し、適切に保存します。

イ　資料収集

（ア）収集対象

・加曽利貝塚の発掘調査で出土した実物資料及び発掘調査記録

・縄文時代の遺跡や貝塚からの出土品などの実物資料

・縄文時代の文化や社会、貝塚の研究に必要な二次資料

（イ）収集方法

・加曽利貝塚の発掘調査

・他の研究機関や個人などからの寄贈・寄託・購入

・縄文時代の文化や社会、貝塚に関する情報収集

ウ　資料保存

（ア）分類・保存方法

・材質による分類（土製品、石製品、貝製品、骨角歯牙製品、木製品　等）

（イ）保存環境

・資料の形態・性質などに応じた適切な保存環境の確保

・重要文化財の保存への対応

・防災体制及び災害発生時の対応体制の整備

・防火防犯体制の整備

（３）情報公開・発信

ア　基本方針

調査・研究や資料収集の過程で得られた情報は、データベース等に整理して広く公開し、研究者や学生をはじめ、博物館の内外で利活用できるようにします。

また、研究の成果はシンポジウムや学術雑誌等で積極的に発信し、学術的な交流を深め、縄文時代の文化や社会、加曽利貝塚の価値を広く社会に伝えます。

イ　調査・研究成果の公開

・展示への反映
・研究の様子を来館者が見られる場や機会の提供
・シンポジウム、研究集会などの開催
・学術雑誌での論文発表
・研究紀要、博物館Ｗｅｂサイトなどへの掲載

ウ　資料の活用

（ア）一次資料の活用

・展示における公開・活用

（イ）二次資料の活用

・縄文・貝塚遺跡を中心とした発掘関連情報のデータベース構築
・分散して保存されている収蔵資料の情報を一元的に管理できるデータベース構築
・構築したデータベースを調査・研究、教育・普及等に活用できるよう公開

（ウ）図書の公開

・一般向けの図書の公開（開架書庫）
・研究用の図書の公開（閉架書庫、申請よる閲覧）

（４）展示

ア　基本方針

様々な興味・関心を持つ人々に対して、遊びや気軽な体験から本格的な学習や研究・体験まで、幅広いアプローチによる展示や体験を、館内から屋外まで史跡全体を活用して展開します。その内容は、調査・研究成果を反映した学術的な裏付けに基づき、常に更新し続けることを目指します。

イ　館内での展開内容

（ア）常設展示

・縄文時代の文化や社会、貝塚の性格、加曽利貝塚の価値や保存の歩みなどについて最新の調査・研究成果に基づき展示という形態で紹介
・主体的な思考や体験を重視した「探究」「没入」「対話」の三つの手法で展開
・季節や時間・距離等の制約がない多様な体験など、屋外では実施できない体験プログラムを実施
・縄文時代の暮らしを体験・体感することにより、縄文文化をとらえ直し、自然と調和・共存する持続可能な未来を考えるきっかけとする
・調査・研究成果を速やかに反映するとともに、体験プログラムの内容を定期的に変えるなど、幾度も訪れたくなる展示・体験

（イ）企画展示

・一定期間ごとに多様なテーマや広い視点で縄文時代や加曽利貝塚を多角的に学び、楽しめる企画展・特別展を展開し、リピーターの確保にもつなげる
・学芸員が行う調査・研究や共同研究、最新の発掘調査の成果の紹介をはじめ、常設展示の理解を深めるための展示
・市民による調査・研究の成果や、土器づくりなどの活動の成果発表など、市民からの提案に基づく展示
・芸術的観点からのテーマ設定、指定文化財の資料や注目を浴びた遺跡の展示など、縄文文化の魅力を伝えるための展示

（ウ）コレクション展示

・寄贈・寄託された日本全国の貝塚関連資料などを展示

（エ）導入展示

・来館者への問いかけ、シンボリックな資料の展示などにより、常設・企画・コレクション展示に興味を抱くきっかけを提供

【常設展示の展開案】

探究型展示（加曽利ラボ） ～研究者になったつもりで、縄文時代と加曽利貝塚を深く探究～
出土した実物資料から究明された縄文時代の文化や社会、加曽利貝塚の生活誌について展示し、縄文時代や加曽利貝塚の特徴、これまでの調査・研究の歩みを伝える。 加曽利貝塚固有の物語を取り上げ、加曽利ムラに住んだ人々の生活誌や集落・生産の場・聖なる場・死者の場などの生活空間を探究する場とする。縄文人が地域の自然を活かした最適解を見つけ出し、他の地域とつなぐネットワークを構築して持続可能な社会を営んだことを紹介する。 また、来館者が調査・研究の一端を体験できるコーナーや学芸員の作業風景の公開などを通して、そのライブ感を伝えるとともに、没入型展示（縄文体験空間）や屋外での体験プログラムの根拠となった研究成果を詳しく説明するコーナーとしても位置付け、連動した活動を行う。
没入型展示（縄文体験空間） ～縄文人になりきり、縄文の世界を楽しむ没入体験～
最新の調査・研究成果に基づき、縄文時代の加曽利ムラを再現した空間で、ムラの一員として縄文の暮らしを体験。時間や季節の移り変わりも演出する臨場感のあるエデュテインメント空間で、年齢や学習深度、興味等に応じて、屋外の史跡では体験できない多様なメニューを提供し、自然と調和・共存する持続可能な未来を考えるきっかけとする。 縄文人に扮した案内役のスタッフが実演や体験サポートを行うことで、安全かつ、充実した体験を提供し、可変的で特徴のある体験・交流の場を創出する。
対話型展示（未来ラウンジ） ～縄文文化についての対話を通じて、未来へのヒントを得る～
縄文をテーマにした現代・未来志向の対話の場。展示や体験を通して学んだことをもとに現代と縄文時代の違いや共通点を考え、私たちの未来にとって大切なものを考えたり、縄文時代や現代をとらえ直すための体験プログラムを行う。 最新の研究成果も反映しながら、グローバルな視点で縄文時代の生活誌や縄文文化における自然と人間の調和・共存のシステムなどを取り上げ、対話を通じて理解を深めるとともに、豊かな生態系に基づく持続可能な人間社会の未来を考えるきっかけとする。また、オンラインによる館外への情報発信拠点としても位置付け、地域の学校や国内外の博物館等とつないだプログラムも開催する。

ウ　館外での展開内容（野外展示）

・特別史跡全体を展示物ととらえ、発掘調査・研究に基づく整備を実施

ゾーン	整 備 内 容
遺構保存ゾーン	遺構の露出展示など、発掘成果に基づく整備
公開活用ゾーン	復元集落の整備など、縄文時代の生活を再現
縄文植生ゾーン	縄文時代の生活に利用された植物を育成

・「遺構保存ゾーン」での本物の縄文にふれる体験の提供、「公開活用ゾーン」での縄文時代の生活再現、「縄文植生ゾーン」での衣食住に利用された植物の観察など、加曽利貝塚の現地でその環境を活かした体験プログラムを実施

・火を使った体験や自然環境を活かした体験など、館内では実施できない屋外ならではの内容を重視し、知識・技術の習得・実践につながる内容を実施

・屋内展示と野外展示とが一体的に体験・体感できる、フィールドミュージアムとしてのストーリーの構築

（５）教育・普及

ア　基本方針

展示を通じて生まれた来館者の興味・関心や理解をさらに深め、自発的な学習を支援します。来館者の多様な興味に対応できる教材やプログラムを、最新の研究成果を活かして開発します。また、学校教育や生涯学習の支援を積極的に推進し、地域の歴史や伝統文化に対する誇りや愛着を育みます。

運営にあたっては、新博物館の運営、加曽利貝塚の調査・研究、史跡保全などに参画するボランティアなどの人材育成を行い、多様な人々の交流を促進します。

イ　内容

（ア）学校教育・生涯学習の支援

・学校団体の来館の受入れ、案内、見学コースや体験学習などの提供

・カリキュラムに合わせた教材や授業案の開発、教員向け講座の開催

・市内の小・中学校、公民館などの社会教育施設、美術館や文化ホールなどの文化施設にスタッフを派遣し、出張講座を開催

・出土資料（レプリカなど）、ワークシートなどを含む貸出用キットの開発・提供

・博物館実習など大学との連携

（イ）コアエリア全体で展開する体験プログラムやイベントの企画・開催

・縄文文化を体験するプログラムの企画・開催

・新博物館や史跡において、来館者層を広げるための様々なイベントの企画・開催

・周辺施設を活用し、最新の調査・研究成果を活かしたシンポジウムや公開講座などの企画・開催

＜例＞　特別史跡加曽利貝塚を中心としたガイドツアー、貝塚の発掘体験、
縄文まつり、ナイトミュージアム、ナイトウォーク、縄文キャンプ、
物々交換マーケット、トークイベント、貝塚コンサート、野外シアターなど

＜これまでの実績例＞

縄文春まつり（石器による魚の解体ショー）

縄文春まつり（土器抽選会）

ナイトミュージアム（貝塚コンサート）

ナイトミュージアム（星空観察会）

（ウ）人材育成

a　既存団体との連携

「ＮＰＯ法人加曽利貝塚博物館友の会」、「加曽利貝塚土器づくり同好会」、「加曽利貝塚ガイドの会」、「加曽利貝塚自然の会」、「坂月川愛好会」、「縄文の森と水辺を守る会」などの協力の下、様々な事業を展開するとともに、定期的な講習などを通じて人材を育成

b　新規スタッフの募集・育成

博物館の館内・館外での体験サポートや、文化財ＩＰＭにおける日常管理などを担う人材を募集・育成

（６）史跡ガイダンス

ア　基本方針

史跡見学の起点となるガイダンス機能として、加曽利貝塚に関する基礎的な情報に加え、来館者が縄文時代や加曽利貝塚について理解を深められるよう、コアエリア、関連史跡をはじめとした周辺エリアに関する利用案内や体験プログラムなどの情報を提供します。

イ　内容

（ア）コアエリアの案内

・はじめて訪れる利用者に対して、コアエリアの全体像を示し、回遊を促進する
・加曽利貝塚の価値や特徴など、概要の紹介
・加曽利貝塚の見どころ、所要時間別見学ルート、見学する上での注意事項などの案内
・史跡で開催しているイベント、体験プログラムなどの案内

（イ）関連史跡をはじめとした周辺エリアの案内

・周辺エリアに点在する史跡荒屋敷貝塚や史跡花輪貝塚などの縄文時代の遺跡、都川や海（ポートパーク）などの加曽利貝塚と関連の深い場所の紹介
・周辺エリアにおいて開催されるイベント、体験プログラムなどの案内

（ウ）展望スペース

・坂月川をはさんで特別史跡加曽利貝塚をはじめ市内を一望できる、展望スペースやテラスなどを設置

（７）利用者サービス

ア　基本方針

コアエリア全体の見学や体験をサポートする休憩や飲食などの利用者サービスの充実を図り、民間活力の導入を検討します。

イ　内容

（ア）レストラン等の飲食スペース

・史跡や博物館の見学者が気軽に利用でき、快適に過ごすことができる、満足度の高い飲食スペースの運営
・加曽利貝塚ならではのメニューなど、訪れてみたくなる飲食の提供

（イ）ミュージアムショップ

・来館記念となる商品や加曽利貝塚にちなんだオリジナルグッズ、博物館のテーマに関する書籍などを販売するミュージアムショップの運営

（ウ）キッズコーナー

・より幅広い年齢層をターゲットとするため、未就学児でも安心して保護者とともに楽しめるスペースを設置

（８）広報・集客連携

ア　基本方針

縄文時代や加曽利貝塚の価値と魅力を広く認知・理解してもらい、さらなる集客やリピート利用につなげるため、新博物館と加曽利貝塚のブランディングを推進し、新博物館のコンセプト「生きている縄文 学び、体験し、考える -それは未来への道しるべ-」に基づく一貫性のあるサービスの提供を図ります。

また、ブランド戦略を踏まえた広報により、サービス内容やターゲット層に合わせた的確な情報発信を進めます。加曽利貝塚ＰＲ大使「かそりーぬ」についても、引き続き新博物館や加曽利貝塚に関するＰＲ活動での活用を図ります。

さらに、様々な集客イベントの誘致や、周辺施設と連携することで、新たな来館者の獲得やリピーターづくりにつなげます。

イ　加曽利貝塚のブランディング

（ア）加曽利貝塚が提供する価値

・実益　：特別史跡で本物の発掘資料や貝塚の規模感などにふれる体験
・情緒　：縄文の暮らしを観察し、五感を研ぎ澄まして発見・共感する非日常体験
・価値観：縄文社会のライフスタイルや考え方、自然との共生のあり方を体験
・感性　：土器などの造形美や独特の文化・思想等にふれる体験

（イ）　サービス内容

・提供する体験価値のテーマは「発見」「研究」「想像」「共感」「創造」「学習」とし、これに沿って体験内容やイベント内容を企画推進する。
・体験価値を企画として顕在化させる際の手引きとして、ＳＤＧｓ、五感への訴求、多様性の尊重、継続性・日常性を促すことを意図した企画とする。

（ウ）ターゲット

・歴史・考古学の専門家やファンのみならず、普段、博物館や史跡を訪れる機会のない人々にも関心を持ってもらい、気軽に来てもらうためのＰＲ活動を行う。
・将来の縄文・考古学ファンを育て、加曽利貝塚が持続的・長期的に利活用されるために、子どもたちへのＰＲ活動も積極的に行う。

（エ）実施体制

・体験やイベントの企画開発にあたっては、「企画者」「指導者」「実施場所」「体験者」を明確に設定し、具体的で集客効果の高い企画づくりにつなげる。

・体験やイベントの運営は、市の直営だけでなく、民間事業者や地域団体の力を活用することを積極的に検討する。

ウ　内容

（ア）各種媒体での情報発信・広報

・博物館の存在や目的をはじめとする基本情報や、様々な事業活動、イベント等の取り組みを国内外に広く発信する広報を積極的に行う。

・ブランディングのターゲット層に情報を届けるため、広報はイベントや体験内容に合わせてふさわしいメディア、ＳＮＳ（ソーシャルネットワークサービス）などを効果的に活用する。

・利用者からの声も積極的に活動に活かしていくため、双方向の情報発信のあり方についても検討を行う。

（イ）集客イベントの誘致

・新博物館や史跡において、新たな加曽利貝塚のファンを獲得したり、未来のファン、サポーター、研究者を育成することを目指し、様々な集客イベントを行って、加曽利貝塚の認知度を向上させる。

（ウ）周辺施設との連携

・来館者を周遊させるために、近隣の遺跡や文化施設等と連携し、イベントや展示、入場料の割引などを実施

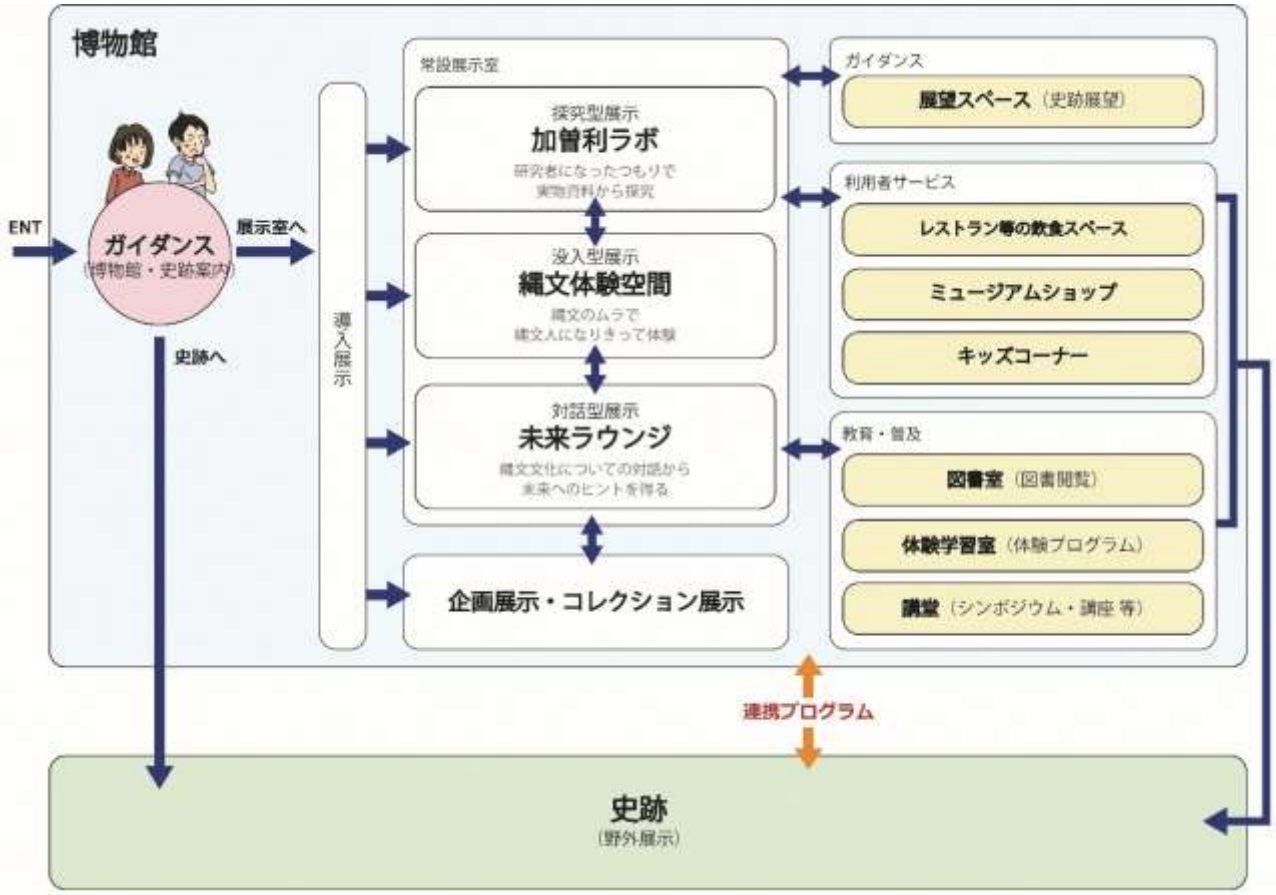
＜例＞　貝塚スタンプラリー、共通テーマの企画展の同時開催、
入場料の相互割引やセット券の販売など

4　利用者の見学・体験の流れ

利用者の属性や興味によって館内・史跡の利用場所や順路が異なることを想定し、様々な滞在のしかた、巡り方ができるように計画します。

ガイダンスを起点に、利用者が自由に見学・体験のコースを選択できるようにし、展示室と史跡のそれぞれで充実した体験ができる効果的なストーリーを構築します。

また、利用者サービス、教育・普及のプログラム等もあわせて、全体が相互補完的に連関する流れを計画します。



利用者の興味や利用形態ごとにどのような体験ができるかを具体的に想定し、推奨順路についても複数のバリエーションを計画します。

そのために必要な機能やサービスについても計画します。

※レストラン・ミュージアムショップ等は、適宜利用を想定

5　事業連携等による魅力向上のための取組み

（１）市内での連携

ア　コアエリア全体の情報拠点

コアエリア全体のインフォメーションセンターとして位置づけ、全体の概要やプログラムに関する情報を一元的に集約し、利用者に提供します。

また、Ｗｅｂサイト、ＳＮＳなどによる発信を行います。

・利用案内：館内及びコアエリアのマップ、見学時間、公開状況などを提供
・学術情報：加曽利貝塚に関する調査・研究成果を提供
・イベント・プログラム情報：コアエリア内で開催されるイベント、各種プログラムなどの開催情報やそれらの参加申込みの受付状況などを一元的に管理
・無料公衆無線ＬＡＮ（Wi-Fi）環境の整備

イ　関連施設との機能の分担・集約及び連携

市内にある関連施設と事業活動の役割分担や連携を進めます。

・千葉市立郷土博物館、千葉市埋蔵文化財調査センターとの役割分担・集約
・千葉県立中央博物館など近隣の博物館との連携
・公民館・図書館・生涯学習センターなど社会教育施設との連携

ウ　サテライト周遊ネットワークの全体像

・周辺エリアに点在する貝塚をはじめ、サテライトから新博物館、また新博物館からサテライトといった双方向性のある展示や学習機会、情報提供
・サテライトの周遊を促すため、縄文時代の文化や社会、貝塚に興味を持つ利用者に対する周辺エリアの見どころや利用案内、来訪に必要な交通手段などの情報提供
・コアエリアへの来訪を促進するため、市民や市内を訪れた人々に対する加曽利貝塚に関する情報発信
・国内外からの集客拡大のため、観光協会や民間事業者などと連携した、加曽利貝塚を中心にした観光プロモーション、ツアー商品の開発、情報発信

（２）県内の縄文遺跡及び関連施設との連携

縄文時代の貝塚を有する自治体の博物館とともに東京湾東岸の貝塚遺跡群のネットワークを形成し、展示の共同開催や調査・研究、教育・普及活動等での連携を進めます。

（３）国内の縄文遺跡及び関連施設との連携

世界文化遺産である「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成遺跡をはじめ、国内の縄文遺跡や博物館と連携し、縄文文化の価値と魅力を広く世界へ発信します。また、成田国際空港に近い利点を活かし、「縄文」の玄関口としてのＰＲ活動を推進します。

Ⅲ　施設計画

1　施設整備の方針

（１）特別史跡加曽利貝塚との連続性の確保

・史跡や周囲の自然環境と調和しながら、遠方からも視認性の高い建築とします。
・史跡を望む展望設備を整備し、加曽利貝塚の全景を見渡せるようにします。
・史跡や周辺のフィールドへ来館者を誘う、連続性の高い施設とします。

（２）登録博物館や公開承認施設の基準に適合する施設整備

・登録博物館として、貴重な収蔵資料を後世に継承するとともに、収蔵資料や他館からの借用資料などを安全に公開するための施設とします。
・文化庁による国宝･重要文化財の公開承認施設の基準に適合する施設整備を目指し、資料の搬入･搬出経路、収蔵環境や展示環境、防災計画などに配慮した施設とします。
・文化財ＩＰＭに配慮した施設とします。
・多様な利用者が安全・安心な環境で活動できるよう、施設全体をユニバーサルデザインに配慮して計画します。
（千葉県福祉のまちづくり条例及び千葉市バリアフリーマスタープランに準拠）
・調査・研究機能の拡充を図るとともに、その一部をガラス張りにするなど、積極的に公開します。

（３）ＳＤＧｓに沿った施設整備と災害への対応

・省エネルギー型の空調設備や照明を導入するとともに、壁面緑化により建物の緑被率を高めるなど、エネルギー効率の向上に配慮した施設とします。
・自然エネルギーの活用やバイオトイレの導入など、低炭素化や水の利用効率を高める仕組みを取り入れ、地球環境に負荷の少ない施設とします。
・地震や洪水などの自然災害から、収蔵庫・展示室・資料や電源などが被害を受けないように配慮した災害に強い施設とします。
・自然災害の発生時には、来館者の安全確保を行うとともに、地域の避難・救助に寄与する役割を担えるよう、必要な場や設備を整えます。

（４）出会いや地域交流の場としての機能拡充

・コアエリア全体で来館者が一日中楽しく過ごすための起点として、出会いや交流の場となる「ミーツ（ＭＥＥＴＳ）」を整備します。全ての来館者が利用しやすい位置に設置することにより、来館者がコアエリアで展開している様々な事業に出会えるとともに、来館者や新博物館に関わる様々な人々が出会い、交流が生まれるきっかけを創出します。
・通常、バックヤードで行われる調査・研究やボランティアによる多彩な活動など、新博物館に関わる幅広い活動の様子に来館者が触れることができるよう工夫します。
・博物館の魅力や楽しみ方を高める利用者サービスは、民間活力を導入し、にぎわいを創出します。

・市民や来館者の活動場所など、市民参画を促進するための機能を十分に確保します。

（５）博物館へのアクセスの拡充

・公共交通機関を利用して来館しやすいよう、最寄り駅やバス停からのアクセスの拡充を図ります。

・自家用車や団体バスによる来館に対応するため、必要な駐車場面積を確保します。

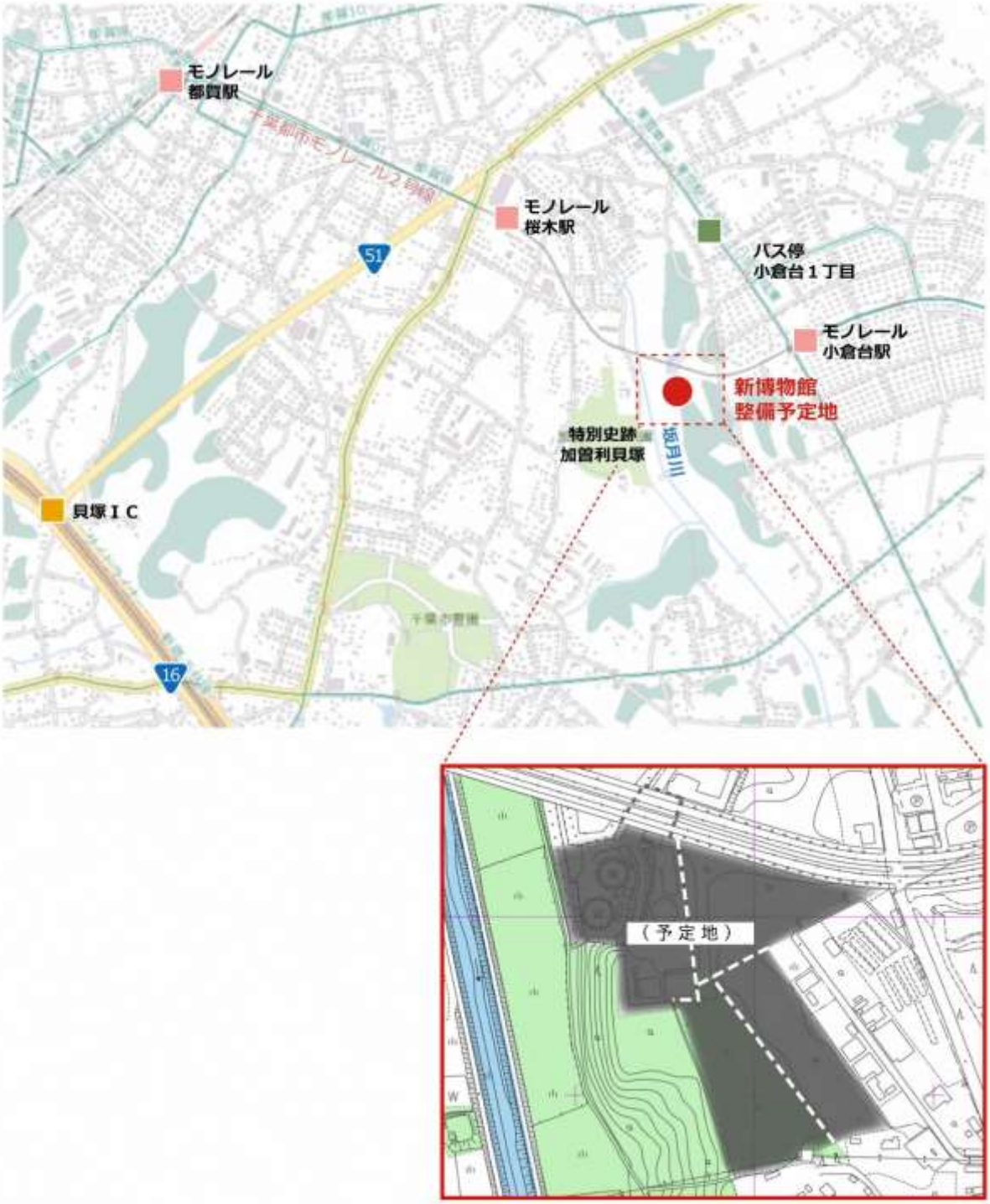
・新博物館から史跡まで、来館者が快適かつ円滑に移動できる歩行空間を整備します。

2　施設計画検討に係る条件設定、予定地の条件整理

（１）敷地の位置

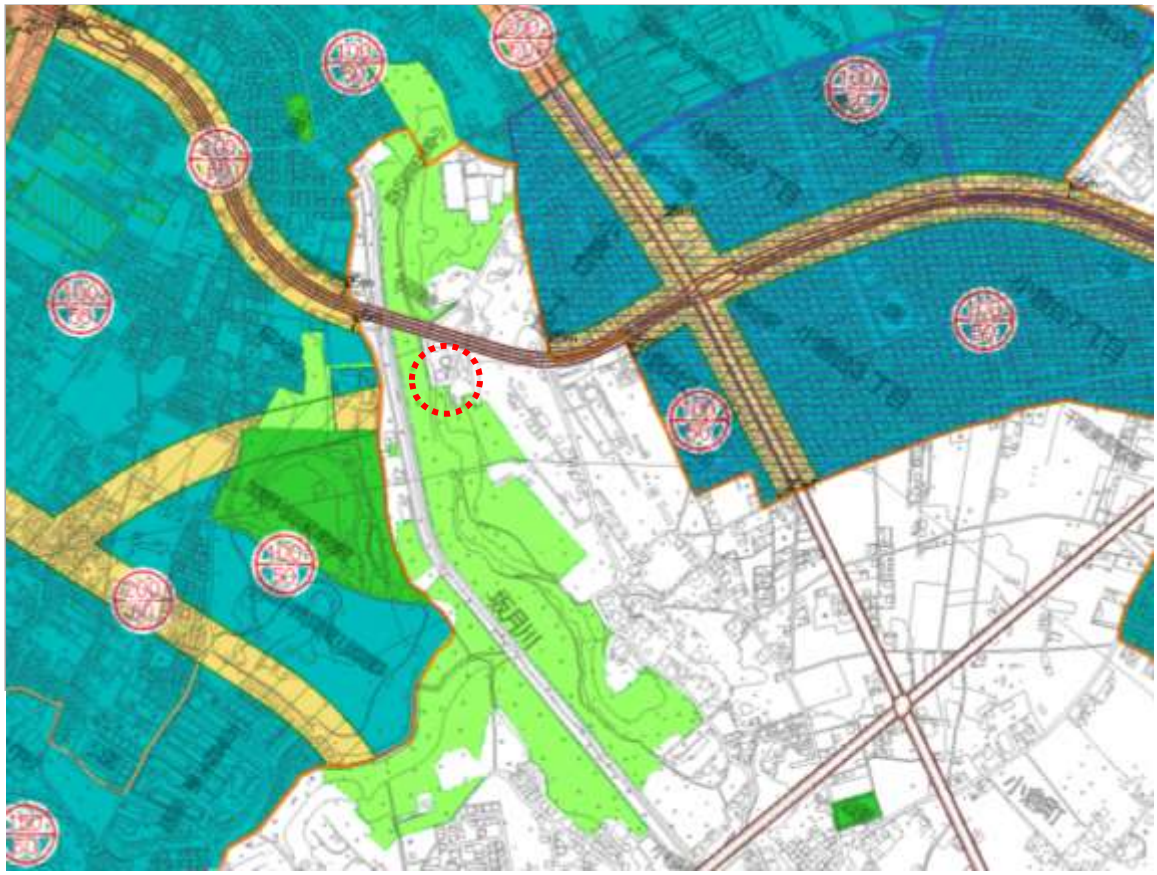
モノレールや幹線道路から視認性が高く、運営や集客の観点で効果的な活用方法が見込める旧小倉浄化センター跡地及びその周辺の民有地を利用します。

（２）敷地面積　　約２万㎡



（３）法的な基本事項

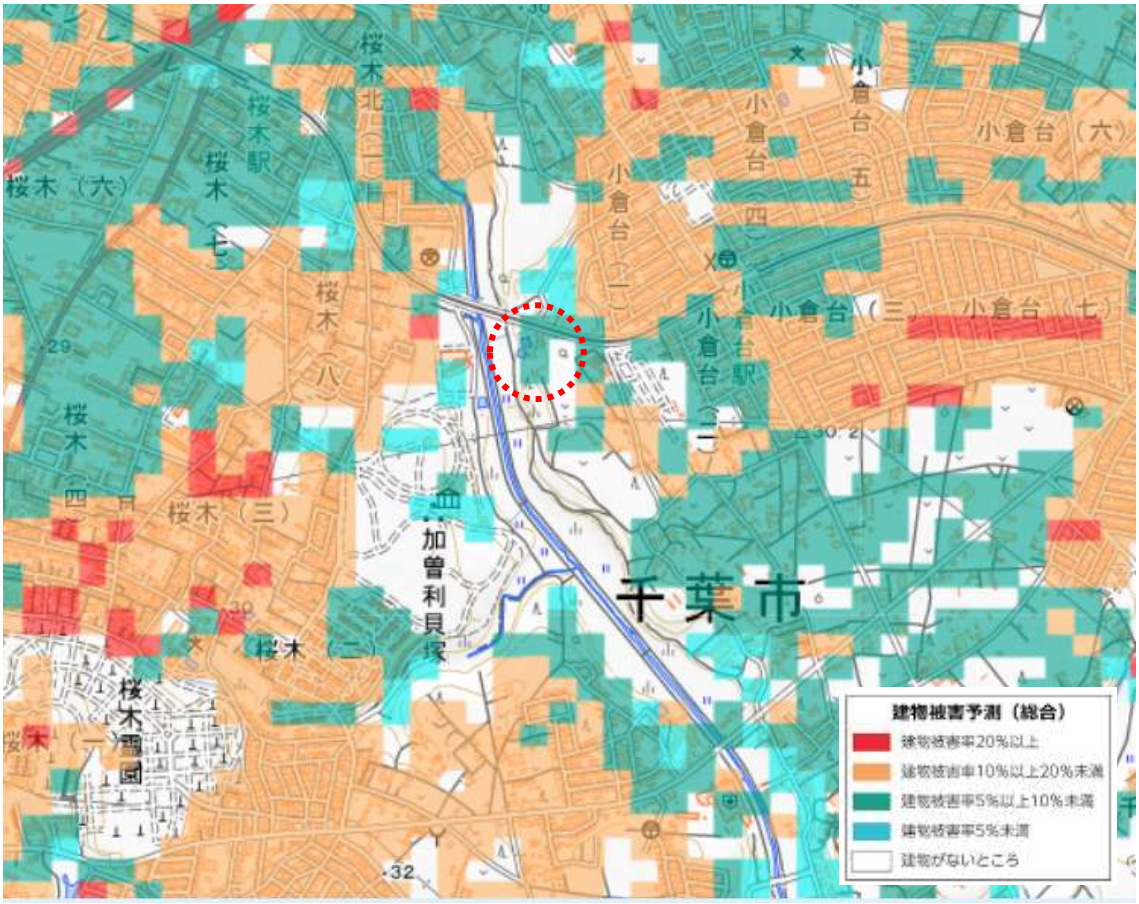
用途地域	市街化調整区域 建ぺい率　　：　６０％ 容積率　　：２００％ 道路斜線制限：勾配１．５ 隣地斜線制限：２０ｍ＋勾配１．２５
整備条件など	・坂月川流域は、「特別緑地保全地区」に指定されている



（４）自然災害の想定

ア　地震による建物被害予測

「千葉市ハザードマップ」によると、千葉直下地震（マグニチュード７．３）が発生した場合、計画敷地（図中赤丸印）における揺れ・液状化・急傾斜地崩壊・火災によって建物が全壊・焼失する可能性は、５％以上１０％未満です。



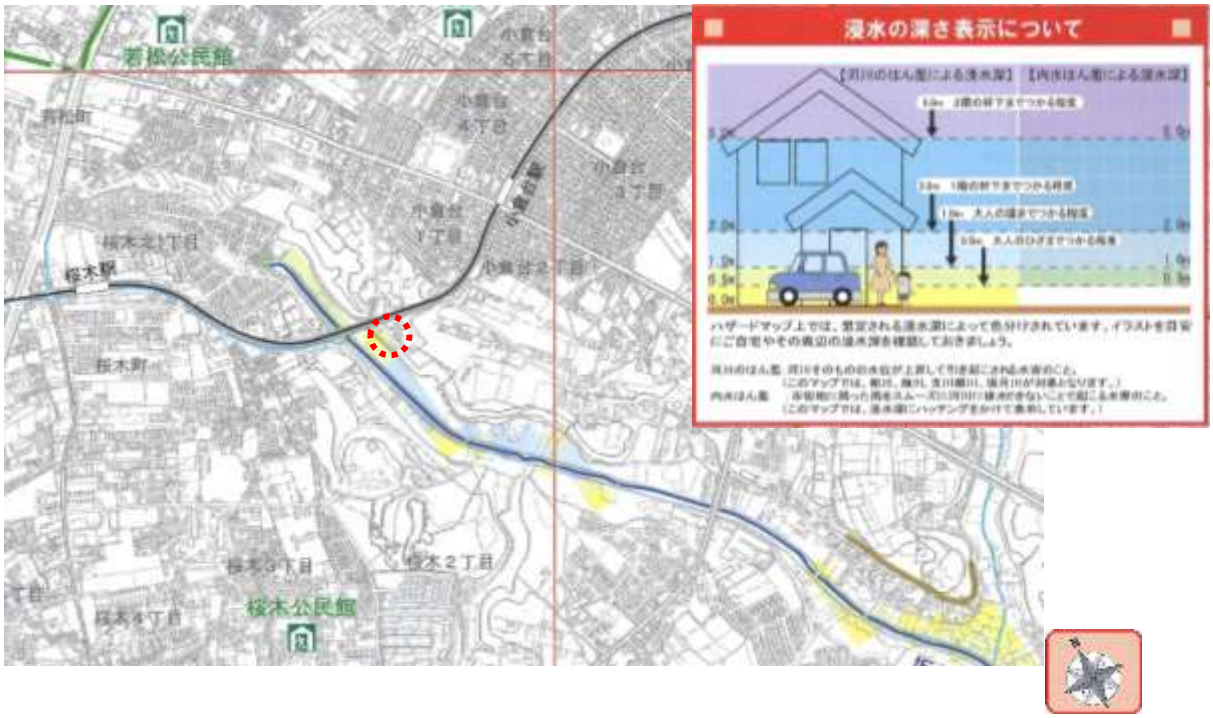
千葉直下地震（マグニチュード７．３）が発生した場合の揺れやすさ（想定震度）は震度６強です。液状化の危険度は「なし（５段階の最低レベル）」で、急傾斜地崩壊による建物全壊の危険度ランクは、予測されていません。

地震の揺れによる展示品や収蔵品の転倒や落下防止に配慮した設計とします。

イ　洪水による浸水被害予測

「千葉市 都川水系浸水想定図」によると、計画敷地周辺における河川のはん濫による浸水深は０．５ｍと想定されています。

展示室、収蔵庫、電源施設等は浸水被害を受けないように配慮した施設とします。



（５）自然災害発生時の対応

ア　来場者への対応

発災時に利用者（来館者）等の一時滞在機能を有する施設をめざします。

平常時：利用者等保護に関する防災計画の策定と職員等への周知、年 1 回程度の訓練を行います。

施設の安全確保、利用者等保護のための備蓄を行います。

発災時：利用者等の保護を行います。

適宜利用者等に対する情報提供を行います。

イ　周辺住民の支援

自然災害の発生時に、地域の避難・救助に寄与する役割を担い、周辺住民の方々に携帯電話の充電などの支援が行えるよう、必要な設備等を計画します。

ウ　博物館における防災対策

自然災害に関する日常の予防点検と被災時の対応マニュアルを整備し、訓練を行います。

3　諸室の構成

（1）諸室機能

部門	エリア	
	室名	概要・与条件など
収集・保存	出土資料収蔵庫	・加曽利貝塚の出土資料のうち、展示・閲覧対応の資料を中心に収蔵 ・一部をオープン収蔵庫とすることを検討 ・空調設備、収蔵庫扉、収蔵棚を備える
	写真図面収蔵庫	・写真や図面などの二次資料の保存
	特別収蔵庫・前室	・特に厳密な温湿度管理が必要な資料を保管 ・恒温恒湿空調、ガス消火設備、収蔵庫扉、収蔵棚を備える
	一時保管庫・前室	・他館からの借用資料の一時保管、温湿度環境に適応させるための慣らしを行う ・恒温恒湿空調、ガス消火設備、収蔵庫扉を備える
	搬入口・トラックヤード・荷解室	・資料の搬出入や荷解き作業を行う ・搬入口は専用とする。4ｔトラックを収容できるトラックヤードを設け、閉鎖空間で資料の搬出入を行うために必要な設備を備える
	作業室・倉庫	・受け入れ資料の確認、登録作業、資料貸出に係る梱包作業等を実施 ・梱包材等の資材を保管する倉庫を併設
調査・研究	研究室	・学芸員、客員研究員の研究スペース ・市民研究員が利用できるスペースも確保
	ミーティングルーム	・学芸員の会議、研究セミナーなどを開催
	図書室	・研究図書を保管する ・集密書架を導入する
	収蔵資料整理室	・収蔵資料の整理、調査、修復作業などを行う
	発掘資料整理室	・発掘資料の整理、調査、記録作業などを行う
	分析研究室	・資料の分析を行う ・分析に必要な機器や標本収納室を備える
	保存研究室	・資料の保存処置や保存に関わる研究を行う ・必要な機器を備える
	撮影室	・資料の写真撮影を行う

部門	エリア	
	室名	概要・与条件など
展示	加曽利ラボ （探究型展示）	・実物資料の展示、考古実験等の体験を行う ・温湿度管理空調を備える ・実物資料を展示するための展示設備（展示ケース、展示用照明設備等）を設ける ・調査・研究ゾーンで行われている学芸員の作業の様子を見られるよう、配置を検討
	縄文体験空間 （没入型展示）	・調査・研究の成果に基づき、映像などを用いて縄文時代のムラを再現した空間で、縄文の暮らし体験を行う ・縄文時代の景観への没入感を演出するため、できる限り天井高を確保する。
	未来ラウンジ （対話型展示）	・来館者と学芸員、来館者同士が語り合う対話の場 ・活動の記録を蓄積し展示するアーカイブ機能を備える ・オンラインでの対外的な情報発信やコミュニケーションの拠点として必要な設備を備える
	企画展示室	・国宝や重要文化財を含む他館からの借用資料や収蔵資料を活用した企画展・特別展を開催する ・公開承認施設の基準に適合するよう、搬入口から企画展示室までの資料動線に対して、特に配慮した配置とする ・貴重な資料を安定的に展示できるよう、温湿度管理空調、ガス消火設備、展示用照明設備、エアタイトケースを備える ・多様な展示に対応できるよう、可動間仕切を備える
	コレクション展示室	・寄贈・寄託された日本全国の貝塚関連資料など、館のコレクション資料の展示を行う ・貴重な資料を安定的に展示できるよう、温湿度管理空調、ガス消火設備、展示用照明設備、エアタイトケースを備える
	展示ロビー （導入展示）	・常設展示や企画展示へのきっかけとなる展示として、実物資料（厳密な温湿度管理が不要な資料等）展示などを行う
	展示準備室・備品倉庫	・展示準備作業を行う ・展示備品の保管用倉庫を備える

部門	エリア	
	室名	概要・与条件など
教育・普及	体験学習室	・調理を含む体験学習を行う ・１クラスが同時に活動できるよう、必要な設備を備える ・水や火気を利用するため、実物資料を扱うゾーン（収集・保存ゾーン、展示ゾーン等）と充分離して配置する
	講堂	・セミナーやワークショップを開催する ・映像・音響設備を備える ・２クラス同時に利用できる設備を備える
	活動ルーム	・博物館友の会、土器づくり同好会、ガイドの会のメンバーや市民研究員の活動スペースと控え室を兼ねる ・作業机、ロッカー、コピー機等を備える
	レファレンスルーム	・書籍の閲覧、情報検索、学習相談 ・書架、ＰＣ端末を備える
	図書室	・開架式書架を導入する
	土器づくり工房（別棟）	・土器づくり同好会の活動、一般来館者による土器づくり体験を行う ・粘土や薪の保管室、作業台、乾燥棚、土器サンプル展示台等を備える
史跡ガイダンス	史跡・コアエリアのガイダンス	・史跡全体や見どころの紹介、見学ルート案内などを行う
	映像ルーム	・史跡や新博物館の紹介映像やイベント時などの特別映像の上映を行う ・団体来館者の昼食場所としても利用
	展望スペース（屋外）	・貝塚と富士山を望む展望を実現する
利用者サービス（別棟）※民間活力を導入	レストラン等の飲食スペース	・縄文をテーマにした飲食メニューを提供
	ミュージアムショップ	・新博物館の刊行物、体験に必要な道具類、オリジナル商品、土産物などを販売
	キッズコーナー	・未就学児でも安心して保護者とともに楽しめるスペース

部門	エリア	
	室名	概要・与条件など
管理	館長室・応接室	・館長の執務室。応接室を兼ねる
	事務室	・事務職員の執務室
	会議室	・事務職員やスタッフの会議を開催 ・博物館の運営に関わる全員が参加する会議が行える設備を備える
	スタッフ室	・事務職員以外のスタッフの執務室
	ガイド待機ルーム	・史跡ガイドや博物館ガイドの待機スペース
	警備員室	・警備員の執務室 ・セキュリティ設備のほか、警備員の休憩スペースも備える
	その他	・湯沸室、更衣室、倉庫等
共用 電気・機械	エントランスホール・受付	・来館者に対する案内・受付等を行う ・救護室、授乳室、トイレなどの機能を備える
	倉庫・資材室	・備品や資材の保管を行う
	その他	・廊下、階段、エレベーターなど
	機械室	・中央監視室、空調機械室、電気設備室、給排水設備 ガスボンベ庫など

参考：公開承認施設の条件

Ａ．組織等

Ａ－１．重要文化財の保存・活用について専門的知識をもつ施設の長。
Ａ－２．学芸員の資格を有し、文化財の取扱いに習熟した専任者２名以上。
Ａ－３．施設全体の防火及び防犯の体制。

Ｂ．施設・設備

Ｂ－１．耐火耐震構造。
Ｂ－２．内部構造の用途（展示・保存・管理）毎の区分、及び防火措置。
Ｂ－３．温度、相対湿度、照度について、適切な保存環境を維持できる設備。
Ｂ－４．防火及び防犯の設備。
Ｂ－５．観覧者等の安全を確保するための十分な措置。
Ｂ－６．同一の建物内で、他の施設（商業施設を除く）と併設の場合：文化財の保存・公開に係る設備が、専用のものであること。
Ｂ－７．同一の建物内で商業施設と併設の場合：文化財の公開を行う専用の施設として商業施設から隔絶（非常口を除く）していること。

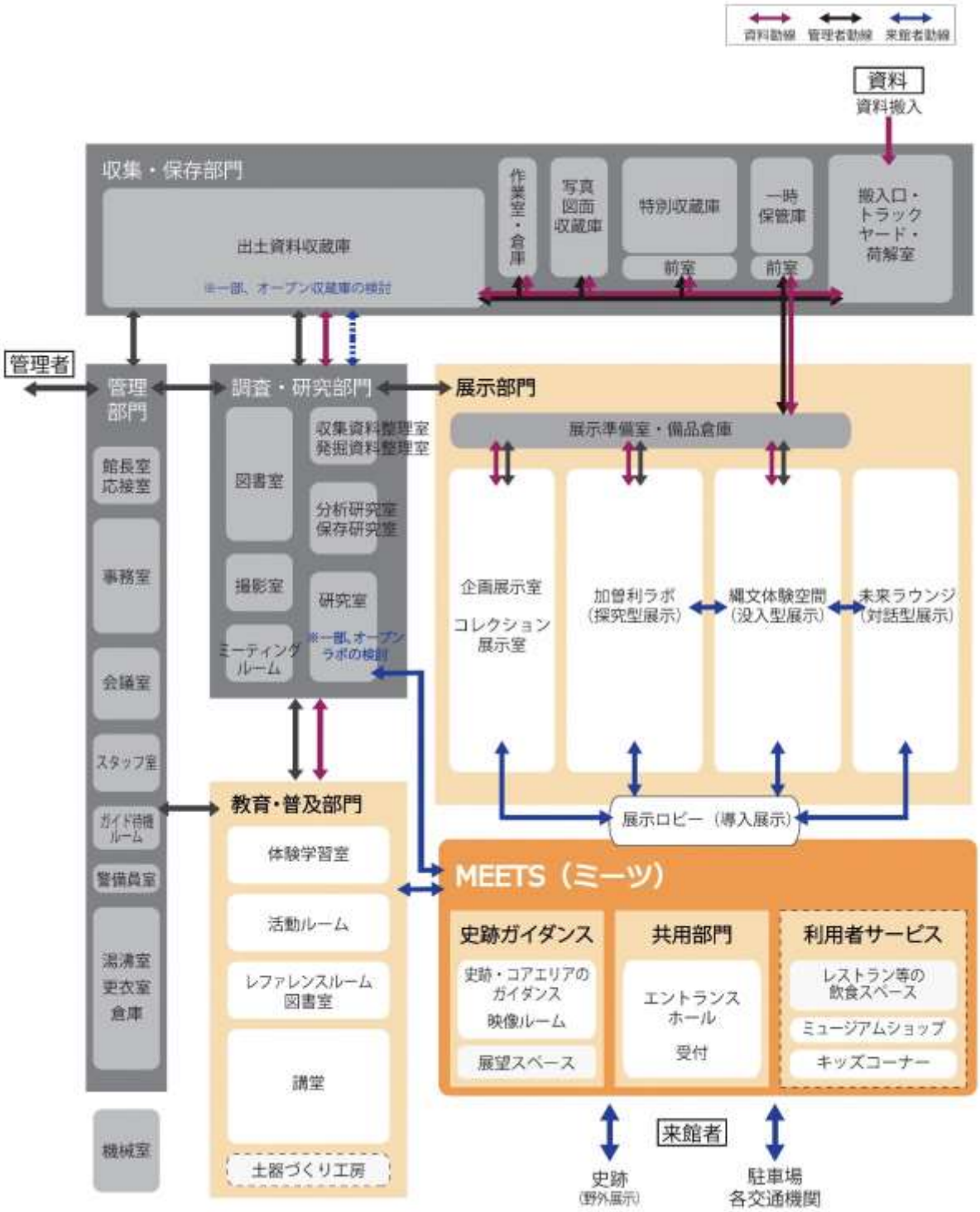
Ｃ．その他

Ｃ－１．申請前５年間に、重要文化財の公開を適切に３回以上行った実績がある。

（２）機能構成

次の機能構成図に基づく機能配置や動線計画を実現します。特に、資料動線については、専用の搬入口を設置し、資料を安全に展示室まで移動できる独立した動線とすることが重要です。

また、新博物館の４つの基本事業をつなぐ機能を「ミーツ（ＭＥＥＴＳ）」と名付け、来館者動線の中心に位置づけます。



Ⅳ　展示計画

1　展示展開の方針

（1）調査・研究成果を反映

・継続的に実施される調査・研究の成果を反映し、学術的な裏付けに基づき、常に更新し続ける展示を実現します。

・貴重な実物資料を間近で詳細に観覧できる展示環境を整備します。

・活発な調査・研究活動と連携し、最新の調査・研究の成果やその解明されるまでのプロセスや、研究手法にも触れられる、ライブ感のある展示を目指します。

（2）主体的な体験を重視

・縄文時代の文化と社会、貝塚について、より身近なこととして興味を持てるよう、情報を一方的に伝えるのではなく、来館者が自ら考えたり、試したり、調べたりしながら、双方向に学ぶことができる、参加体験型の展示を目指します。

・伝えるべきテーマに応じて、研究者になったつもりでの「探究」や、縄文時代の世界への「没入」、縄文文化を通じて今の暮らしや未来を考える「対話」といった展示の手法を効果的に用いることで、新博物館全体で縄文時代に親しめる構成にします。

・体験を通して知識や技術を習得し、ステップアップしながら、縄文時代や加曽利貝塚についてより深く学ぶことができる仕組みを用意し、新たな学びへの意欲を高めます。

（3）特別史跡内における体験との連携・機能分担を重視

・博物館における展示は、特別史跡での体験とともに総合的に検討すべきものであり、それぞれの特性や特徴を活かした性格付けを行い具体的に計画します。

・双方の回遊性を高めるストーリーを構築することで、来館者の幅広いニーズに応え、様々な体験を組み合わせることにより、学びを深める相乗効果を生み出します。

（4）多様な興味・関心や幅広い客層への対応

・多様な興味・関心を持つ来館者が、縄文時代や加曽利貝塚について深く知り、楽しめるよう、各自の興味・関心に合わせて好きなところから自由に見学し、心行くまで滞在できる構成とします。

・展示室の観覧環境、展示手法、解説手法など、展示に関わるハード・ソフトの両面からユニバーサルデザインに配慮した整備を行います。

2　テーマ構成

展示は、常設展示、企画展示、コレクション展示で構成します。さらに、各展示への興味を喚起する導入展示を館内の各所で展開します。

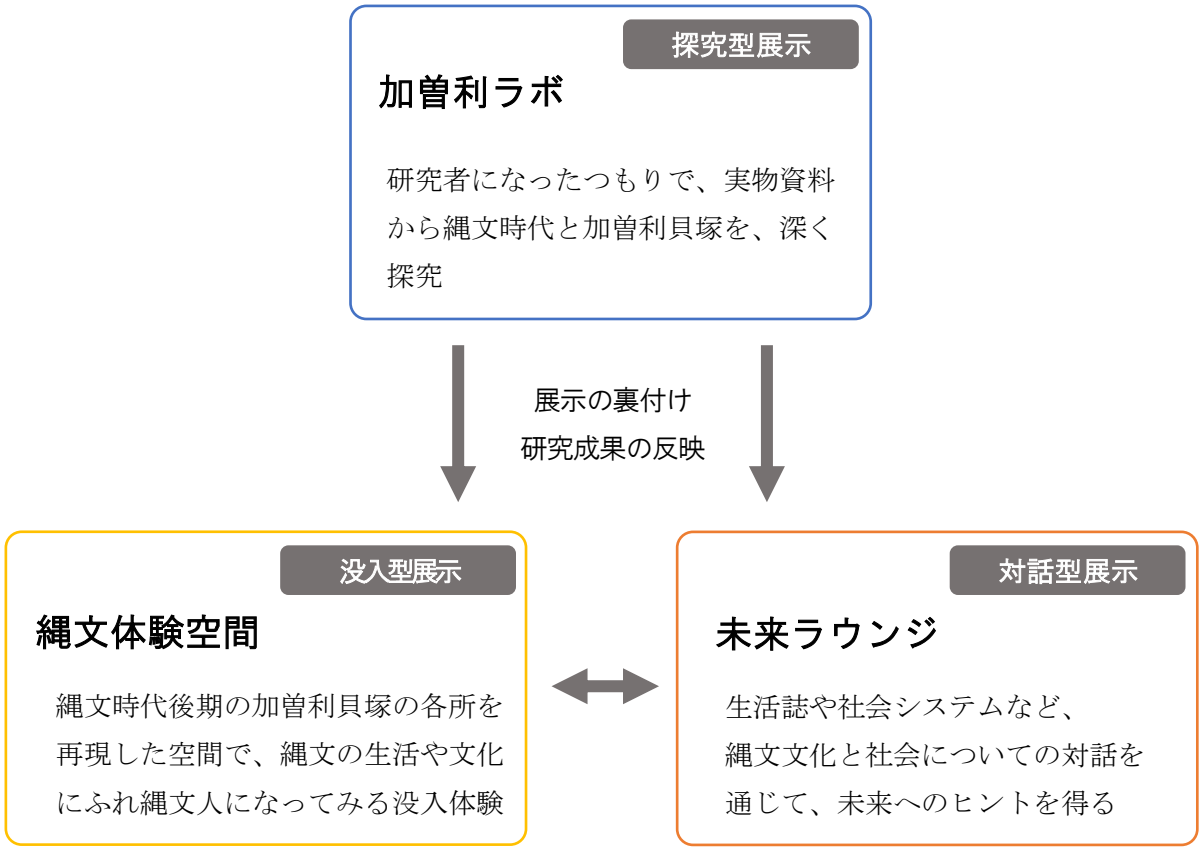
（1）常設展示

博物館で行われる日々の調査・研究の成果をもとに、加曽利貝塚だけでなく全国の貝塚や千葉県の縄文遺跡を広く扱い、東京湾の大型貝塚群の価値と縄文文化の魅力と重要性を広く発信します。日々の研究の進展を反映して、展示内容も更新し、発展させます。

展示の中核となる探究型展示「加曽利ラボ」、最新の研究成果や探究型展示での検証などを反映させた没入型体験展示「縄文体験空間」、縄文をテーマにした未来志向の対話型展示「未来ラウンジ」の３つの展示エリアで構成し、来館者が興味や関心に応じて、自由に見学ができるようにします。

また、来館者の展示内での体験及び活動並びにワークショップでの発見が、博物館の新たな展示や調査・研究にもつながるような、来館者と研究の距離が近い博物館を目指します。

【全体構成】



ア　探求型展示「加曽利ラボ」

～研究者になったつもりで、縄文時代を深く探究～

＜ねらい＞

・出土資料をもとに、貝塚を中心とした縄文時代の文化や社会を解明する４つのテーマで構成し、全国の貝塚と千葉県の縄文遺跡、豊かな自然環境、及びその地域性によって育まれた加曽利貝塚の生活誌や社会システムなどを紹介します。

・考古学や自然科学をはじめ、学際的な研究者の目線から解説や問いかけを行い、来館者が自ら考えたり、試行しながら学べる場とします。

＜特　徴＞

① 可変性・拡張性の高い展示の実現

・縄文時代の文化と社会、貝塚の研究拠点として幅広く調査研究や資料収集を進め、その進展や発展に応じて、展示のテーマや内容を継続的に更新していくため、可変性・拡張性のある展示を目指します。

・展示ケース、照明、空調など、貴重な出土資料の保存環境に配慮した適切な展示環境を整備します。

② 来館者の探究を促す仕掛けの充実

・資料や解説をただ見るだけではなく、来館者が興味を持ったり、考えるヒントになるような問いかけや情報を提供し、疑問に思ったことを調べるなど、一歩掘り下げて学べる構成とします。

・縄文時代の生活の様子などは、必要に応じてジオラマ模型や映像などの二次資料を効果的に組み合わせることで、広がりのある分かりやすい展示を実現します。

③ 調査・研究の最新成果に触れられるラボの新設

・来館者が調査・研究の一端を体験できる「アクティブラボ」を整備し、展示している出土資料と連動しながら学べるようにします。

・また、学芸員などの作業エリアを公開する「オープンラボ」を併設し、調査・研究の様子をライブ感とともに伝えます。

探究型展示「加曽利ラボ」の空間イメージ

（ア）加曽利ラボ展示室

【展示テーマ案】

大テーマ	中テーマ
縄文ムラのくらし 縄文人の生業システム、資源利用技術、食糧貯蔵、定住化、祭祀儀礼、死生観など、縄文時代の営みの様子を、読み解いた実験や思考などのプロセスとともに紹介する。	ムラの形成と里山里海 定住を支えた食と資源利用 魚介類の利用 植物の利用 狩りとイヌ 埋葬と縄文人のからだ いのり・まつり・装い
貝塚と縄文社会 全国の１/４の貝塚が集まる千葉県とその周辺にある貝塚の特徴、貝塚研究から明らかになった縄文の文化や社会構造、交換ネットワークなどを紹介する。	房総の海と台地 貝塚文化のあけぼの 東京湾漁撈の幕開け 中期大型貝塚群と内陸集落群 後晩期大型貝塚とネットワーク社会
貝塚を知る 縄文時代の貝塚から弥生時代以降、そして世界へと地域を広げて貝塚の特徴や多様性を紹介する。	大型貝塚とはなにか 列島各地の貝塚 弥生時代以降の貝塚 世界の貝塚 貝塚の発掘と分析
加曽利貝塚の魅力 加曽利貝塚の発掘や保存の歴史、研究で明らかになった成果や、史跡の価値、現代社会に問いかけるもの、今後の研究の展望などを紹介する。	考古学史の中の加曽利貝塚 加曽利Ｅ式土器と加曽利Ｂ式土器 加曽利貝塚の発掘と研究 保存運動

（イ）アクティブラボ

・学芸員が最新の研究結果の発表を行ったり、来館者が出土資料の調査・分析などの研究の一部を体験できる場を整備します。加曽利貝塚で実績のある「実験考古学」を実践し、考古学研究の裾野を広げる役割も担います。

・個人で行う調査から、体験サポーターによるワークショップまで、様々な体験が行える場とします。

・情報検索端末などを設置することで、館や関連施設の収蔵資料について調べられる環境を整備します。

・市民が調査・研究に参加し、その成果を発表する場としても活用します。

＜体験例＞

◎ 出土した貝の種類を図鑑で調べ、現在の千葉の海岸で採れる貝殻と比較する

◎ 粘土板と縄で模様をつける体験から、出土した土器に使われた縄目を推定する

◎ 出土資料から、縄文人の食事メニューを推定する

◎ 日本各地の加曽利Ｅ式土器を比較し分類する など

図鑑を見ながら、出土した貝殻と
現在の千葉の貝を比較する

縄文土器の形と現代の様々な容器を比べて、
土器の用途を推定する

粘土板に縄で模様をつけながら、
土器の縄目を推定する

（ウ）オープンラボ

・学芸員やスタッフなどが活動する諸室の一部を、来館者が窓越しに作業風景を見学できるよう整備し、博物館で行われている調査・研究のライブ感を伝えます。

＜公開する内容の例＞

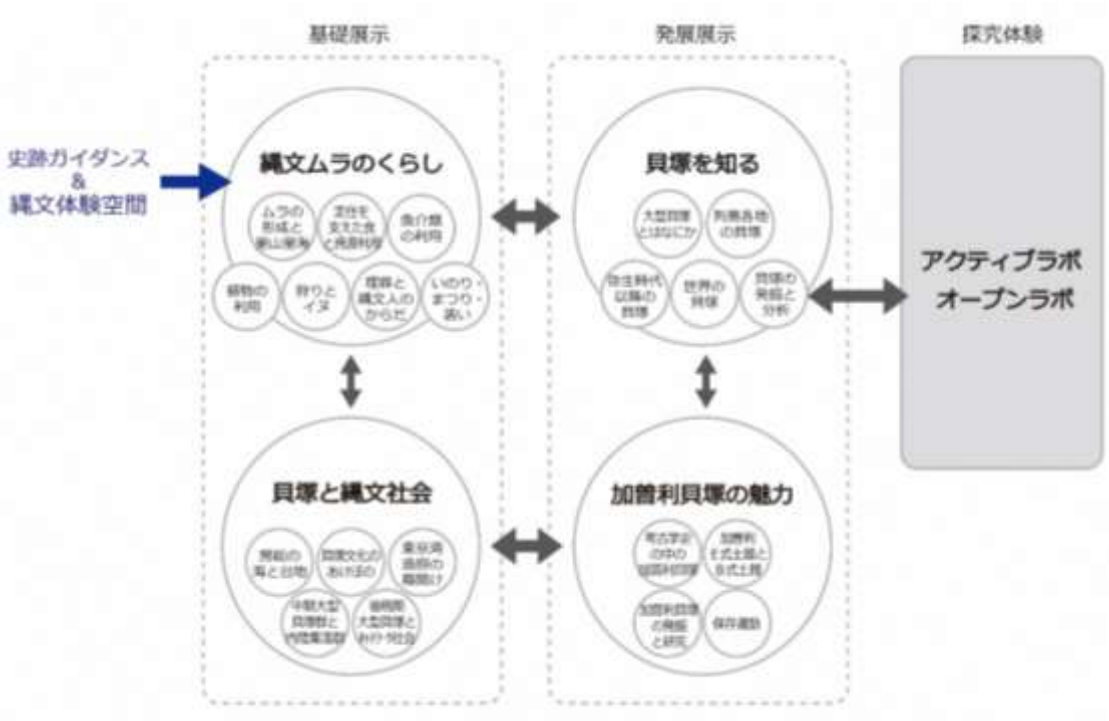
◎ 学芸員が行う縄文時代に関する研究

◎ 加曽利貝塚出土資料の整理・分析作業

◎ 収蔵資料の整理・修復作業

◎ 企画展示などの展示準備作業　等

（エ）加曽利ラボの全体構成案



イ　没入型展示「縄文体験空間」
～縄文人になりきり、縄文の世界を楽しむ没入体験～

＜ねらい＞

・最新の調査・研究成果に基づき、「加曽利ラボ」の展示内容とも連動する、加曽利貝塚の各所を再現した空間の中で、来館者が縄文人になりきり、身体や五感を使って縄文の暮らしや文化を体験できる場を提供します。
・縄文時代に出会えるエデュテインメント空間と位置付け、屋外の史跡ではできない体験を提供するとともに、史跡での本格体験の導入として縄文への興味を喚起し、史跡とのすみわけ・相乗効果を図ります。

＜特　徴＞

① 縄文時代の加曽利のムラを再現

・縄文時代後期の加曽利のムラと周辺環境を、発掘調査や研究成果を基に再現します。各場所ではシーンやテーマに基づき、大型映像などを用いた空間演出と、縄文時代の生活や文化を体験できます。
・来館者が身体や五感を使って行うアナログの体験と、デジタル技術を駆使した空間演出の両方を重視し、テーマや体験内容に合わせてバランスよく盛り込みます。また、様々なプログラムを入れ替えながら可変的に行います。
・内容に精通したスタッフが案内役としてサポートし、体験を充実させるとともに、場を盛り上げます。

② 屋内でしかできない時間・空間演出で体験性をより充実

・照明や音響等によって、時間や季節の移り変わり、気象の変化などを演出し、没入感を高めることで、史跡での一時的な体験では味わえない、ここならではの体験を提供します。
・映像やＶＲ・ＡＲ技術により、体験のスピードアップを図ることができるほか、ムラから川、海などへの実際には難しい移動も可能にします。
・屋外の天候に左右されずにいつでも参加することができ、管理も行き届きやすい環境で、子どもから高齢者まで安全な体験の場を提供します。

③ 複数のシーン再現によりストーリー性のある体験を実現

・屋外の史跡では網羅できない複数のシーン（貝塚、森、川、海など）を一つの空間内に整備することで、一過性、単独の体験ではなく、ストーリー立てたメニューで、知識や技術を習得できる機会を提供します。
・気軽に参加できる入門編から複数のシーンをめぐる応用編まで、多様なメニューを提供し、子どもからシニア層までが楽しめる場を提供します。

没入型展示「縄文体験空間」の空間イメージ（昼の演出）

没入型展示「縄文体験空間」の空間イメージ（夜の演出）

没入型展示「縄文体験空間」の空間イメージ（シアター演出）

星空観察と夜の暗さを体験する
（映像と照明演出）

・電気のない夜の暗さとその中で暮らす工夫を学ぶ。
・縄文人が見ていたであろう星空を眺める。

丸木舟を漕いで坂月川を下る
（VR ゴーグル）

・丸木舟の模型を漕ぐ体験。
・VR ゴーグルをかけた視界の中で、坂月川の風景が船着場から下流、海へと移り変わる。

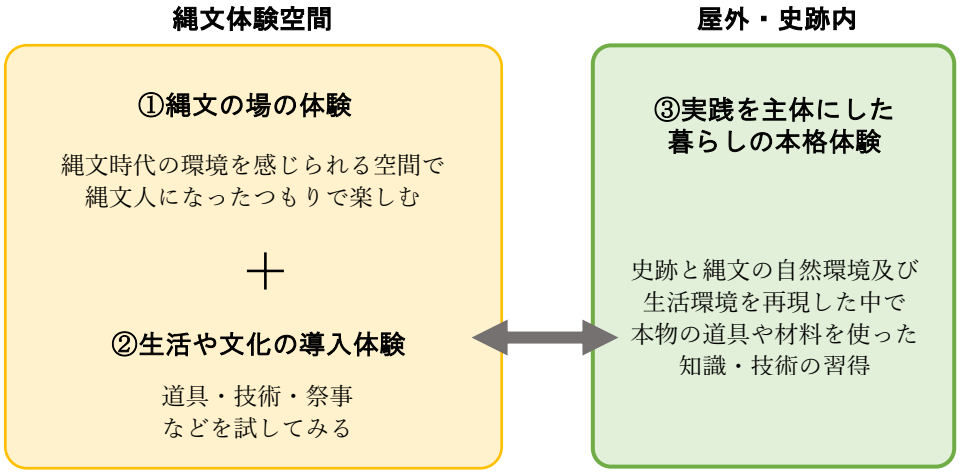
「縄文体験空間」の体験イメージ

（ア）縄文体験空間における体験の構成案

・史跡での単体での体験では理解しにくい、時間や季節に応じた暮らしや、距離・空間を超えたムラの広がりなどをリアルに体感しながら学べる場として整備します。

・いつでも、誰でも気軽に参加でき、来館者が興味・関心に応じて知識や経験を深めることができるよう、体験の深度やつながりを重視します。

・縄文時代後期の加曽利貝塚にタイムスリップしたかのような空間の中で、複数のメニューを組み合わせて体験したり、他の来館者やスタッフと協力して活動するなど、主体的で臨場感の高い体験の提供を実現します。



（イ）縄文体験空間と屋外・史跡内における体験のすみわけ

・屋外・史跡内での体験の性格を分けることで、それぞれの特徴を活かして、より効果的な体験を実現し、相乗効果が得られるように総合的に計画します。

	縄文体験空間	屋外・史跡内
場のあり方	・再現された縄文時代の加曽利のムラの中で体験	・現在の史跡の自然の中で体験
学び・効果	・縄文時代の環境や文化を全身で体感 ・専門的な展示や屋外体験への導入	・知識・技術の習得、実践
対象者	・初心者でも安心して参加できる ・屋外・史跡内の体験の導入的機能も担う	・関心の深い来館者が対象 ・一部に年齢制限あり
時間、季節 天候　等	・デジタル演出により複数の時間帯・季節・天候の体験を一定の時間内でできる	・季節や時間に合わせて体験 ・雨天中止のメニューもあり
場所	・距離・空間を超え複数の場所を巡る体験が可能	・基本的に一つの場所で体験
手法	・映像演出＋アナログ(レプリカや模型)	・アナログ中心、本物の材料が多い
体験の形態	・出入り自由、自分のペースで進められる ・時間指定のプログラムも実施	・定時開催、数時間かかる ・講師が主導し参加者全員で進める
広がり･深さ	・複数の体験を組み合わせ、知見を広げる	・一つの体験に集中して深める
水と火	・基本的には使用しない	・たき火等も含め使用可能

（ウ）場の構成要素と体験内容の例

・発掘調査・研究に基づき、館内での実施にふさわしい、加曽利貝塚ならではの体験を計画します。広場と住居や森・川などのサイトをめぐることで、重層的な体験を可能にします。

・日ごとに実施メニューを組み替えたり、研究の進展に新しい体験メニューを追加するなど、運用の自由度が高いものとします。

シーンの例	想定される体験内容
① 広 場 （中央シアター）	・体験案内 ・夜の暗さや天候の変化に対応して行動する ・縄文の星空を眺める
② 貝 塚	・壊れた土器などの道具を送る ・儀礼・祭祀に参加する （人や犬の埋葬、土偶を破壊して送る、まつり 等）
③ 竪穴住居	・住居を組み上げ、材料や構造を理解する ・土器を作る ・土器を使った料理の模擬体験 ・アンギン編み
④ 森	・四季の移り変わりを１日で体験し、季節に応じた食料を得る
⑤ 坂月川	・丸木舟を漕いで海まで下り、海との距離を感じる （VR 等を使用）
⑥ 海	・食用の貝を選んで採集する ・網や釣竿をつかって魚を釣る

＜空間や体験の演出手法の例＞

◎ 四季や天気、時間の演出

プロジェクションマッピングや効果音などを用いて、様々な環境を再現する

◎ 舟漕ぎ等の体験

インタラクティブ映像やバーチャル映像などを盛り込み、坂月川を下って海に出るなどの、屋外では実際の実施が難しい体験を可能にする

◎ 道具や土器などのアイテム

素材感や重さを再現したレプリカで、体験のリアリティを高める

＜発展形の体験プログラムの例＞

発展形の体験として、縄文体験空間内の複数の場や史跡等での体験を組み合わせることで、縄文の暮らしをひとつながりでとらえることができるミッション形式のプログラムや、縄文社会の持続可能性に学ぶプログラムを計画します。

◎ 縄文人の暮らし体験

区 分	体 験 内 容	体 験 場 所
衣	服を作って着よう！	
	材料（カラムシ）の採集・加工	屋外・史跡内
	アンギン編み・縫製・装飾	縄文体験空間　竪穴住居 又は体験学習室
	試着	縄文体験空間　広場
食	イボキサゴでスープを作ろう！	
	海の食材の調達	縄文体験空間　海
	野山の食材の調達	縄文体験空間　森
	水の調達	縄文体験空間　坂月川
	調理と試食（ワークショップ）	屋外又は体験学習室
住	竪穴住居を作ろう！	
	石器で竪穴を掘る	縄文体験空間　竪穴住居
	材料の伐採・加工	縄文体験空間　竪穴住居
	住居の組み上げ	縄文体験空間　竪穴住居
	茅葺き	屋外・復元集落

◎ 縄文人に学ぶ循環型社会

・骨や角などを使った道具づくり

縄文人は狩りで得たイノシシやシカなどを余すことなく利用し、骨や角、牙も道具に加工して使いました。大量に残る貝殻の中にも刃を付けて魚の鱗取り等に利用したものがあり、焼いて貝灰にして漆喰として利用したことも加曽利貝塚の発掘調査で確認されています。

釣り針などの骨角器や貝刃などの製作実演や製作体験を通じて、限りある資源を有効に活用していたことを学びます。

・転用された道具を使ってみる

縄文人は壊れたり、欠けたりした土器や石器などを、別の用途の道具に転用し、使い続けました。転用した道具類のレプリカの使用実演や使用体験を通じて、資源を最後まで使い切る工夫を学びます。

ウ　対話型展示「未来ラウンジ」
～縄文文化についての対話を通じて、未来へのヒントを得る～

＜ねらい＞

・「加曽利ラボ」や「縄文体験空間」での展示や体験を通して学んだ縄文時代の暮らしや文化について、現代の私たちの目線で振り返り、縄文人の生活と現代の生活のつながりや、今の暮らしや未来に活かせることを考え、共有する場を提供します。
・来館者同士が縄文文化の学びや気づきを通じて楽しく自由な発想で対話し、未来へのヒントを発信する場とします。

＜特　徴＞

① 縄文時代のイメージを見直し、持続可能な社会の実現など、現代における様々な課題を考えるきっかけとなる場

・展示や体験を通じて学んだことや感じたことをもとに、豊かな文化や社会を築いていた縄文時代と現代との違いや共通点などを振り返り、将来の世代にわたって恵み豊かな生活を確保できるよう、現代社会における課題を自分自身で考えるきっかけを提供します。
・「男は狩りに出かけ、女はムラで調理をしている」という多くの人が抱いている縄文時代のイメージには、現代のジェンダー観が影響を与えていることが、近年、指摘されています。このような問いかけや問題提起を行うことで、最新の研究成果に基づく学びや気づきにつなげます。

② 意見やアイデアを共有し、多様な活動や交流が展開できる場

・縄文時代の文化や社会をテーマにしたワークショップやミニ講座など、様々な目的や形態で柔軟に活用できる交流・活動の場を提供します。
・アイデアや活動の成果などを広く紹介してリピート利用につなげるとともに、参加していない人に対しても参加する意欲を盛り上げます。

③ オンラインでの情報発信・交流の場

・オンラインで館の活動紹介や体験プログラム、発掘調査現地説明会の様子を配信したり、地域の学校や国内外の博物館等とつなぐプログラムを開催するなど、来館していない人も対象に取り込む情報発信やコミュニケーションの拠点としても位置付けます。そのために必要な配信のためのスタジオやインターネット回線などの設備等を計画します。

＜活動のメニュー例＞

◎ 縄文に学ぶ私たちの未来：縄文時代から持続可能な社会と未来を考察

・縄文時代と現代の生態系を比較し、自然と人の関わり方について対話し、考える。

・ハマグリの稚貝の捕獲規制の可能性をはじめ、縄文人の資源保護や資源の有効活用の工夫を学び、将来の世代にわたって恵み豊かな生活を確保するための取組みについて対話し、考える。

◎ 縄文ギャラリー：出土資料の展示と、縄文をテーマにした創作活動

・縄文の美に啓発されたアート作品の展示、即興演奏会 等

◎ 縄文問答：縄文時代の価値観で現代の当たり前を再考する展示

・「お金や文字がないと生活はどうなるか」などのテーマ設定に対して考えた内容をカードに記入、掲示する。

◎ 私たちの貝塚：未来に残したいものや活動成果のアーカイブ

・５，０００年後の未来に残したい大切なものやメッセージを考える。

・博物館を訪れた人が、参加と閲覧の双方向で楽しめるよう、活動の成果を貝塚のように蓄積し、アーカイブ化する。

◎ 活動紹介：活動団体の活動紹介や成果発表、メンバー募集 等

対話型展示「未来ラウンジ」の空間イメージ

（２）企画展示

縄文時代に関する企画展や特別展を開催し、加曽利貝塚の発掘調査の成果、縄文時代の文化と社会、貝塚に関する研究の成果を紹介します。

また、巡回展も積極的に誘致し、知名度の向上や集客数の増加につなげます。多様な資料の展示に対応できる、可変性の高い展示什器と、公開承認施設の基準に適合する保存・展示環境を整備します。

（３）コレクション展示

これまで収集してきた寄贈・寄託資料を中心に、コレクション資料を展示します。さらに、新たな収集資料の展示なども行い、更新性の高い展示とします。

（４）導入展示

共用エリア「ミーツ（ＭＥＥＴＳ）」をはじめとする各所で、常設展示や企画展示などへの興味を喚起するきっかけとなる展示を展開します。

発掘や研究の最新情報などを紹介する展示、展示の楽しみ方のヒント、問いかけなどにより、より多くの来館者を展示室へと誘います。

＜導入展示の例＞

◎　５，０００年タイムトラベル

加曽利貝塚の周辺に縄文人が暮らしていた５，０００年前から現代までのこの場所の歴史を映像でダイナミックに順にたどり、縄文時代が他の時代に比べて、いかに長く安定していたかを体感できる内容とします。

映像「５，０００年タイムトラベル」のイメージ

３　解説計画

（１）多言語対応

外国からの来館者が楽しめるよう、多言語での解説を検討します。また、ピクトグラムなどの文字によらない手法を取り入れます。

（２）子ども解説

子ども用の解説パネルやワークシートなどの導入を検討し、学校団体での利用や調べ学習にも対応します。

（３）ユニバーサルデザイン

展示の高さの配慮、触れる展示の導入、音声や点字による解説、カラーユニバーサルデザインの導入などを検討し、多様な人々が楽しめる展示を実現します。

（４）テーマに合わせた解説手法

展示エリアのテーマを重視した解説手法で、体験性や学びをより充実させます。

＜各エリアの解説手法の例＞

① 探究型展示「加曽利ラボ」

展示解説の中に学芸員の視点や言葉を盛り込むなど、来館者が縄文の研究活動を身近に感じられるよう工夫します。

まだ解明されていない事柄や、研究者によって意見が分かれる仮説などもその旨を併記しながら紹介することで、調査・研究の奥深さを示します。

また、来館者の積極的な探究を促すため、問いかけを効果的に使った解説を計画します。

② 没入型展示「縄文体験空間」

文字による解説を最小限に止め、体験に必要な情報をエリア内のスタッフなどから聞き取りながら参加することで、文字のなかった縄文の暮らしを実体験できます。

③ 対話型展示「未来ラウンジ」

問いかけ形式でのテーマ提示により、来館者の参加と自発的な思考を促します。

また、学術的な正解ではなく、来館者の意見や考えを集めて展示に反映させることで、より深い思考や来館者同士の交流につなげます。

V　管理運営計画

1　管理運営の方針

（1）調査・研究体制の強化

・新博物館は、縄文文化と貝塚に関わる調査・研究・普及の拠点施設の役割を担うため、その基盤となる調査・研究・普及事業を行うための人員を確保し、組織体制を拡充する必要があります。

・特別史跡に指定された標準遺跡として発掘調査・研究を推進するとともに、外部の研究機関や研究者とのネットワークを形成する拠点施設としての役割も重視し、より一層の連携拡大を図ります。

・調査・研究体制の強化のため、科学研究費の応募資格を有する研究機関としての指定を目指します。

（2）「みんなでつくる・育てる博物館」を体現する運営体制の構築

・新博物館は現博物館と比べて施設規模が大きくなり、体験学習やワークショップなど、活動の幅が広がり、市民や関係機関など多様な主体の参画による博物館活動を展開することになります。それに対応できる運営体制を構築します。

・これまでの取組みで構築されてきた市民などによる活動をより一層支援し、その活動の活性化を図るとともに、新たな取組みや参画の仕組みを導入し、より多くの参画を促進します。

（3）活発な博物館活動を持続的に展開するための工夫

・公開承認施設の基準に適合する施設を目指し、全国の博物館から重要な遺物を借用して開催する魅力的な展覧会も積極的に行います。

・長期にわたり活発な事業活動を展開できるよう、民間活力の導入などの最適な手法を検討し、効率的な運営の仕組みを構築します。

・新博物館の活動や運営に対する市民や利用者の声を的確にとらえ、運営や整備に反映できる評価・改善システムのあり方を検討します。

・事業活動の展開にあたり、協賛などの外部資金の確保に向けた取組みを積極的に展開します。

（4）市民や利用者の満足度を高める運営の実現

・高齢者や障害者、子どもたちなど、誰もが利用しやすい施設を目指し、多様な利用者や利用形態に対応したきめ細やかなサービスを提供します。

・誰もが気軽に利用できるよう、市民や利用者の立場に立った開館時間や利用料金などを検討します。

2　管理運営方式

新博物館の運営方式については、調査・研究を中心に直営を維持します。また、増加する業務の効率化とサービスの向上を目指し、包括的な民間委託等の導入について、次の条件を踏まえた検討を行います。

（1）貴重な資産の保全・継承、活用に向けた持続性や専門性の確保

特別史跡や貴重な自然環境を保全し、次世代に継承するともに、未来に向けた活用を図るためは、博物館としての中長期的な活動方針に基づき、専門的知識や識見を有する館長の下、学芸員が責任感や高い意識を持って安定的・持続的に調査・研究などの博物館活動に従事できることが求められます。こうした環境を実現し、文化財の取扱いに習熟した学芸員の育成やノウハウの蓄積・継承を図ることが重要です。

（2）公益的視点に立った連携体制の確保

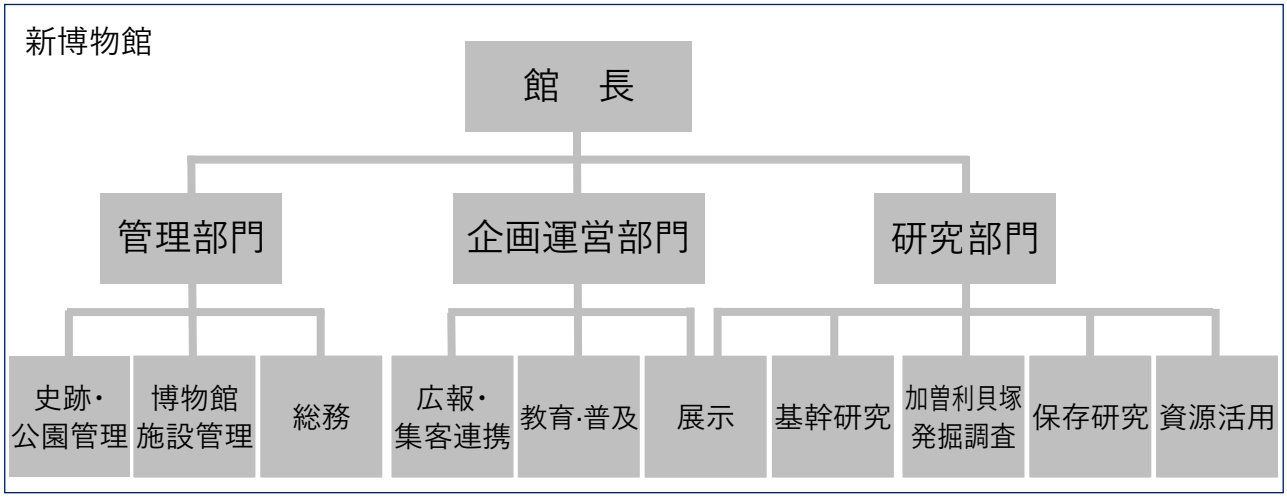
周辺エリアと連携したサテライト周遊ネットワークを実現するためには、地域振興の牽引役として、多様な主体とのネットワーク構築が求められます。こうした公益性の高い事業を展開するとともに、具体的な連携事業の展開に必要なノウハウを提供できることが求められます。

（3）市の施策との連動

市の文化振興施策や地域振興施策を反映した運営が求められます。

3　管理運営体制のイメージ

事業活動を展開するためには、次のような機能を有する体制が望まれます。

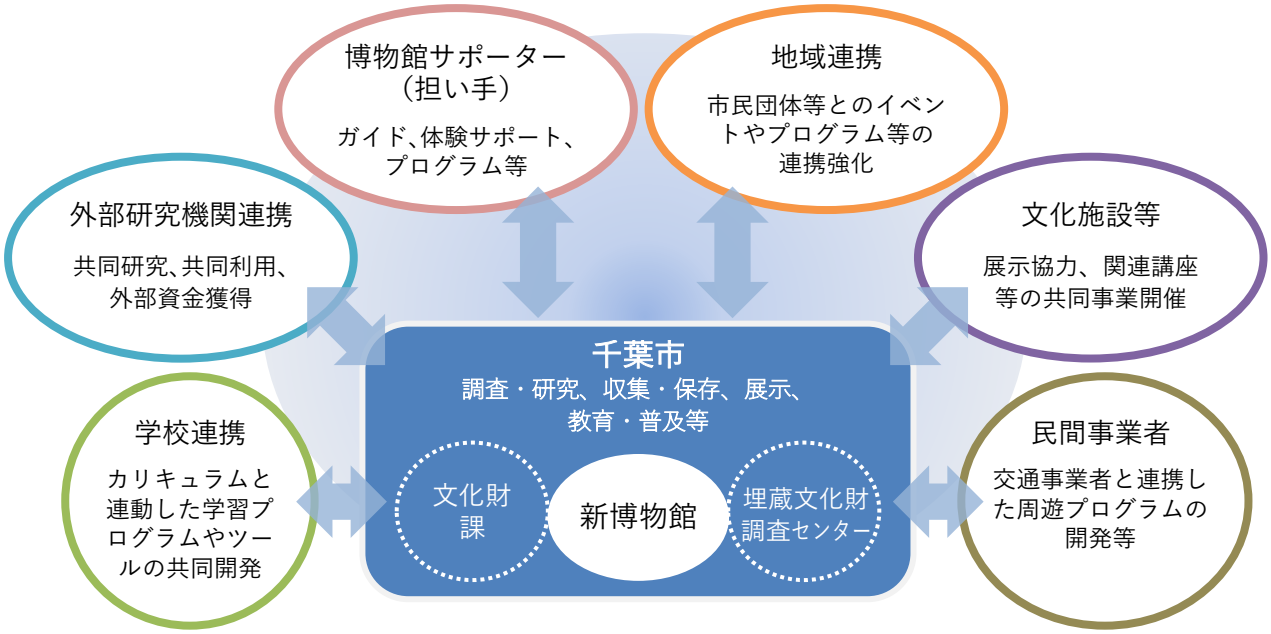


【主な業務】

部門		主な業務分担	展示	研究資源化	市民協働
管理部門	史跡･公園管理	史跡・公園・植栽の管理	－	－	史跡･公園の維持管理
	博物館施設管理	施設維持管理、空調設備運用管理 文化財ＩＰＭ管理	－	－	文化財ＩＰＭ日常管理
	総務	総務・庶務、人事、受付・案内	－	外部資金管理	－
企画運営部門	広報・集客連携	広報、Ｗｅｂサイト･ＳＮＳ更新 年報等の発行、集客連携 サテライトネットワーク運営	企画展等の広報、展示評価	企業連携、外部資金獲得	ＳＮＳ等による情報発信
	教育・普及	史跡ガイダンス、展示解説ガイドの育成 縄文体験･イベント･プログラムの企画･運営 学校連携、団体受入対応	展示の企画・実施、展示解説の企画・編集、企画展連携プログラムの企画・運営	－	学校連携、サテライト連携
	展示	常設展示の展示替え 資料収集、展示解説 企画展の企画・実施		－	展示解説･体験サポート
研究部門	基幹研究	縄文時代の文化と社会や貝塚に関する調査・研究 常設展示の展示替え 企画展の企画・実施		縄文文化や貝塚に関する共同研究、共同利用	調査･研究
	加曽利貝塚発掘調査	加曽利貝塚発掘調査 調査結果の整理･研究 常設展示の展示替え 企画展の企画・実施		加曽利貝塚に関する発掘実習、共同研究	発掘･調査
	保存研究	博物館環境・文化財IPM 遺物の保存処理と化学的分析調査 発掘時の保存処理等 露出展示遺構の保存	－	露出展示遺構に関する共同研究 化学分析に関する共同研究	文化財 IPM に関する協働
	資源活用	収蔵資料･資料データベースの整理･保管･利用 大学等外部研究機関との連携 研究紀要等の編集	資料情報や資料の提供	大学等との共同研究･共同利用の受入	市民等との共同研究･共同利用の受入

4　「みんなでつくる・育てる博物館」に向けた考え方

・新博物館の整備にあたっては、計画段階から市民の参画を促進し、大学などの外部研究機関の協力により、多様な主体が活動しやすい施設づくりについて、みんなで検討します。
・開館後の運営に向け、複数の主体が関わる運営の仕組みづくり、連携・ネットワーク強化に向けて、博物館サポーター（担い手）、大学などの外部研究機関、学校連携、地域連携、などについて最適なあり方を検討します。



（1）博物館の研究資源化に向けた考え方

ア　収蔵資料等の活用

・収蔵資料に関する情報の公開・発信、パブリックドメイン化
・収蔵資料データベースや図書室の公開
・他館との展示連携など収蔵資料の積極的な公開・活用

イ　共同研究の導入

・大学や大学院などの研究機関との共同研究
・科学研究費助成事業をはじめとした外部の競争的資金の導入
・発掘データ、研究論文等の公開・発信、パブリックドメイン化

ウ　施設や史跡の活用

・大学・大学院などの研究機関との博物館施設や史跡の共同利用の推進
・発掘実習、博物館実習の受入など大学の専門職教育との連携

（２）協働による活性化に向けた考え方

ア　協働の仕組みづくり

・「ＮＰＯ法人加曽利貝塚博物館友の会」、「加曽利貝塚土器づくり同好会」、「加曽利貝塚ガイドの会」、「加曽利貝塚自然の会」、「坂月川愛好会」、「縄文の森と水辺を守る会」など実績のある団体の活動の継続・発展

・館内や館外で新たな活動展開をするための人材の募集と育成

・博物館を含めた史跡全体の運営支援のための、新たなサポート体制づくり

イ　広報

・加曽利貝塚とサテライト周遊を組み合わせたツアーなどに関する情報を、観光協会、民間事業者と連携して発信

・市民やインフルエンサーによるＳＮＳでの情報発信を促進する仕掛け

ウ　史跡・公園管理

・博物館サポーターと連携し、史跡・公園管理を推進

・公園で展開する体験プログラムの企画・運営

エ　調査・研究

・市民による調査・研究を支援

・市民との共同研究や共同利用の仕組みを導入

オ　展示解説

・博物館内及び史跡において、博物館サポーターとの連携による展示解説ツールの開発や展示解説ガイドを展開

カ　学校連携

・学校教諭との共同による、カリキュラムと連動した学習プログラムの開発

・博物館サポーターとの連携による学校団体の見学受入体制の拡充

キ　サテライトネットワーク

・周辺エリアや市内文化施設、商業施設等との連携イベントの開催

・電車・モノレール・バスなどの交通事業者と連携した周遊プログラムの開発

・博物館や史跡を拠点としたイベント開催などによる地域活性化

5　開館形態

より多くの市民や利用者が気軽に訪れることができるよう、開館日や開館時間、利用料金を検討します。

（1）休館日、開館時間

・資料や展示、施設の適切な管理を行う必要があることから、一定の休館日や特別休館日の設定は不可欠です。こうしたことを踏まえ、多くの人が利用しやすい休館日のあり方を検討します。

・開館時間は、管理運営の効率性と市民や利用者の利便性のバランスを勘案し、柔軟で弾力的な時間設定を検討します。

（2）利用料金

・常設展示等の観覧については、受益者負担の観点から、原則的に有料とする方向で、減免制度と合わせて、検討します。

・電車・モノレール・バスなどの交通事業者と連携した周遊プログラムなどの導入も検討します。

・撮影や写真原版使用等の資料の特別利用に関する料金設定についても、今後検討します。

特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画

発　　行　　令和４（２０２２）年〇月
制作・編集　　千葉市教育委員会

千葉市教育委員会生涯学習部文化財課
〒260-8730
千葉県千葉市中央区問屋町１－３５　千葉ポートサイドタワー１１階
電　　話　０４３－２４５－５９６０
Ｅメール　bunkazai.EDL@city.chiba.lg.jp